

花も実もある言の葉草は

嘉永二年己酉十二月集之

嘉永三年庚戌正月

大隅國垂水郷

八十四翁□山氏輔（花押）

伊集院八兵衛

藤原兼愷（花押）

┌
(89・オ)

┌
(オ)

┌
(ウ)

┌
(裏表紙)

兼愷のこたひかきあつめたる後編のすさひ
草を見ていたう感するの餘りつゐには世の
人のあまねくもてはやし侍らむ程もおもひ
やられてかくなん書そへ侍りける

雲井まで聞えやあけむ和哥の浦に
としへし鶴のいや高きこゑ

┌
(90・オ)

かす／＼に深き心のたねなれや

九月十三夜會十三首

後水尾院御題
天保十五年辰秋詠之

九月十三夜

1 秋津洲の秋のふたよの名に高き月はいつもさそ仰くらん

月前星

2 名にしおふ月に光をゆつりてや曇らぬ空の星そ稀なる

月前時雨

3 定めなき時雨の雲の中空にくもと見れははる、月影

月前萩

4 袖の月猶身にしみてすめるよの光を送る萩のうはかせ

月前鹿

5 なく鹿の聲も数そふ月かけのふけてやまさる思ひなるらむ

花洛月

6 曇りなき光を花の都人こゝろも月にすみまさるらむ

古寺月

7 露霜の世々にふりぬる山寺は月もいく秋すみなれぬらん

寄月忍恋

8 よなくに忍ふはふかき袖の露いつしりそめて月のとまらん

寄月別恋

9 きぬくのなみたはつらし別路のかたみに契る月も曇りて

寄月変恋

10 かはらしといひし其夜のおも影も月にそ残るひとりねの床

寄月旅泊

11 浪枕うしともいはてあかし潟月にうかるゝとまりとやせん

寄月述懷

12 なへて世はさはりかちなることほりを月にそ□□つ浮雲の空

寄月祝言

13 いく千秋かはらて空に□月□明らけき世の光見すらむ

「ウ」

「ウ」

「(88・ナ)」

20 枝かはす竹のはやしの桜花いくよの春をちきりてやさく

松十首

薄暮松

21 月をまつ軒端の山の夕ぐれに時雨を送る松かせのこゑ

夜松風

22 深きよのたかことのねにかよふらん松にしらふる風のひゝきは

嶺上松

23 横雲は別るゝをちの山のはにあらはれそむるまつのみら立

澗底松

24 谷陰におなし世をふる埋木のたくひにはあらてさかふ松か枝

巖頭松

25 さゝれ石のなれる岩ほにおひのほる松も八千世の数や重ねん

海畔松

26 塩木にももれていく年ふりぬらん磯屋の軒の松のひと本

松臨池

27 よろつ代もかれなてすめる池水に松や葉かへぬ影うつすらん

砌下松

28 十回の花のさかへもみきりなる松の常盤の陰にちきらむ

松為友

29 立馴てともなふ松の陰ふかみ宿のちとせもしる人にせむ

松久緑

30 仰くにもかはらぬ色か北野なる千もとの松の千世のゆく末

寄社祝

31 神垣の世々にさかへん梅桜咲そふはなもまつのみとりも

飛岡天神宮奉納三十一首

天保九年戊戌
正月廿五日詠進

梅十首

立春梅

1 いとはやも花咲そめてけさよりは春も立枝の梅かほるなり

月映梅

2 さやかなる花の光にうつもれて梅の木間は月も霞ます

雪中梅

3 朝戸出の匂ひにしるししら雪のうつむ垣根の梅のはつ花

暁更梅

4 梅か、も猶身にしみて咲花の光にしらむあり明の窓

野径梅

5 打渡す野へのゆき、の袖の上にもほひにもれぬ梅の追風

梅移水

6 匂ひさへ深くそうつる山水に咲そふ梅のはなか、みは

古宅梅

7 住すてしたか世の春のなこりとやふるき軒端ににほふ梅かえ

隣家梅

8 色も香も何かへたてん中垣をさしこす梅のはなのこすゑは

梅迎客

9 うくひすの聲より外にさそはれて人もとひくる宿の梅か香

梅薫枕

10 あくるよを花にいそかん宿の梅匂ふにあかぬ春の枕は

桜十首

桜初開

11 待わふる心もけふはとけそめつ庭のさくらはなのした紐

桜花盛

12 をしなへてみねもふもともさくら色に花咲みつるみよしの、山

獨見桜

13 我のみはあかぬ軒端の山さくら見せはや人に花のゆふはへ

雨後桜

14 庭桜ほころひそめてよるの雨のなこり色そふはなの朝露

深山桜

15 さくら花さける盛はかたはらの深山木までも匂ひそふらん

関路桜

16 戸さしせぬ世にあふ坂の山桜花や関路の人と、むらむ

瀧邊桜

17 しら糸も花をりそへて瀧つ瀬の岩もと桜咲おほふ頃

遠村桜

18 春はいさうときもとはん家桜とを山もとの花のあるしを

閑庭桜

19 咲匂ふ色もあたる花桜とはれぬ庭の春そさひしき

竹間桜

┌
(85・オ)

┌
(86・オ)

┌
(ウ)

暁雞

81 怠らぬ道を訓への庭つ鳥□はあけぬと告□てなくらん

「
(83・ウ)

夜燈

82 ふくるよの寐覚伴ふかひもなしまなはぬ窓の燈のかけ

峯松

83 塵ひちもつもれる山の峯たかくおひのほる松や幾千世の陰

里竹

84 引かこふいくむら竹の打なひきけふり色そふ山もとのさと

磯巖

85 動きなき世々のためしかしら浪のあらふにつきぬ磯の岩ほは

島鶴

86 所から心ありてやすむつるも千世をちきらん松賀浦嶋

岡笹

87 たひ人のゆき、の岡に打さや□風のたえまなひくさ、原

「
(ウ)

江葦

88 いさり火も光かくれすみしま江の芦の若葉の陰浅きころ

浦舟

89 浦浪の明はなれゆく芦間より一葉漕出るあまの釣舟

杣山

90 さかへゆく御代はいつみの杣山の宮木もつきぬ例にやひく

岸苔

91 敷すてしたかふるさとの苔むしろたゝめる岸も幾世かさねて

山家水

92 山里はかけひの竹のよはなれて水の心もすみまさるらん

山家嵐

93 柴の戸のあけぬくれぬと音つれてた□く嵐なるらむ

田家雨

94 すむ里のけふりの末も打しめり田面はるかにくもるむら雨

旅行

95 たひ衣きのふはよそにみねの雲袖にそわくるけさの山こえ

旅宿

96 露のみはなとむすふらん故郷の夢をそたのむ草のまくらに

旅泊

97 沖つ風あらき磯邊のうきねには心くたくる浦浪のこゑ

海眺望

98 夕浪の見るめのとけし住吉の浦のむかひの島も霞みて

寄日祝

99 もろこしもれぬ光や仰くらんてる日の本の明らけき世は

寄社祝

100 住吉の神そ栄へを守るらむ□けん松のことの葉の道

「
(ウ)

「
(84・ウ)

戀二十首

寄月恋

61 きぬくの袖に□しそのかみのわすれかたみや有明の月

寄雲恋

「ウ」

62 あたにのみ思ひみたれてまよふ身のたくひ悲しき空の浮雲

寄雨恋

63 とはぬよのさはりも人の科ならてなみたかすそふ袖のむら雨

寄風恋

64 契り置し人は音せぬ夕くれの心のまつにかせそこと、ふ

寄烟恋

65 もしほたくけふりを胸のおもひにて身はこりすまのうらみこそ、へ

寄関恋

66 心から立へたてゆくうき中はかよはぬふみの文字の関もり

寄瀧恋

67 名にたつもよしや吉野の瀧つ浪□て末の逢□た□ふな

寄原恋

68 うきふしもいと、数そふしの原やしの□たれて□おもふ身は」

(82・オ)

寄橋恋

69 ひとことの便たになしかつらきや久米の岩橋恋渡れとも

寄湊恋

70 立さはくなみたの袖のみなと舟よ□の思ひそうきてたゆたふ

寄木恋

71 いと、猶みたれてそ思ふ青柳のなひくを人のこゝろならねは

寄草恋

72 いつまてかうき身にたえぬ思ひ草心をたねとおひしけるらん

寄鳥恋

73 あふむてふ鳥もことはをかへす世にいらへぬ人よいか、つれなき

寄獣恋

74 小車の牛の綱手のいつまてかくるしき恋に心ひかれん

寄虫恋

「ウ」

75 ひと筋にまつはかなしあま人のくるよもしらぬさ、かにの糸

寄玉恋

76 から人の玉になく身よくらへ見んあはて年ふる袖のなみたは

寄鏡恋

77 今はた、残るつらさのます鏡あひ見し人の影はとまりて

寄枕恋

78 跡もなき夢とはしるや小夜枕かはせし床のすきし昔を

寄衣恋

79 袖の色も涙染ますくれなるの八入の衣ふかきうらみに

寄弓恋

80 引かはる人のこゝろかしらま弓いひ□契の末も□をらて

雑二十首

40 雲霧は立も及はぬふしのねの嵐のうへにすめる月影

湖月

41 さ、波や海ふく風も色見えて鳩てる月の影そすみ行

野月

42 影やとす露分衣はるくをとを里小野の月にあかさ

渡月

43 渡し舟さす□いとなき身の□月も忘れ□夜の川おさ

「
(80・オ)

庭月

44 はらはしなしける庭の蓬生も露の宿とふ月に契りて

関霧

45 越わふる関路も遠し足からの八重山深き霧の戸さしに

聞擣衣

46 余所にきく袖も露けし唐衣うらみてたれかよはに打らん

重陽宴

47 秋ことに花も色そふけふならん世々のためしときくのさかつき

杜紅葉

48 めつらしく心や染んはつしほに浅きは、そのもりの紅葉、

川紅葉

49 川岸に染るはふかし紅葉、の下ゆく水も色かはるまで

九月尽

50 うしとても詠はすてし夕くれの空や限の秋のわかれ路

「
(ウ)

冬十首

初冬時雨

51 冬のくるけしきそ見せて山端に朝ゐる雲や時雨そむらん

落葉

52 枝よりはさそひつくして木のもとのつもる落葉にさはく山かせ

寒草

53 をく霜の色をひとつの垣根哉花の千穂の冬かれの頃

冬月

54 秋に見し露のやとりはかれはて、冬野の霜に氷る月かけ

浅雪

55 影さえし月は残らてあくるよの真砂にうすき初雪の庭

積雪

56 日にそひてつもるやいくへ八重律はらはぬ上の庭のしら雪

池氷

57 此此のをしの契よいかならん夜寒もなれてこほる池水

豊明節會

58 雲の上にけふそ立まふ乙女子かむかしにかへす袖のから玉

潟千鳥

59 とをさかる浪の干潟の塩風にむれて千鳥の聲そ満くる

歳暮

60 過ゆくはよそに思ひし月も日も身に積りてそ年の暮ぬる

「
(81・オ)

20 夕霞立そふ空の果なくもなこりをこめて春そくれ行

夏十首

首夏

21 山々のかすみの衣立かへてみとり色そふ夏はきにけり

待郭公

22 ほと、きすまつよのうさのつもる共思はて猶やつれなかるらむ

聞郭公

23 き、つとも誰にもらさん郭公忍ふころの夜半のひと聲

早苗

24 しめ縄の長き日あかす住吉のみとしろ小田に早苗とる也

「ウ」

溪五月雨

25 山つたひ目馴ぬ瀧もさみたれに落てみなさる谷川の水

夏草

26 たか為にかきもはらはん夏草の花なき色にとつるみきりは

夏月

27 影うつすたもともす、し夏夜の月の桂に風や吹らむ

水邊蛩

28 とふ蛩もゆるやまかき浅沢の水にもけたぬよるの思ひは

夕立

29 淡路島かつくくれてなるかみのなるとの沖にきはふ夕立

六月祓

30 みそき川けふくみしらん塩瀬よりあらはれ出し神の昔も

秋二十首

早秋

31 小夜衣つまふく風も身にしみて寐覚の床に秋やきぬらん

乞巧箋

32 彦星のあふせの影のふくる夜に猶やか、けん庭のともし火

萩風

33 秋よた、さひしくもあるか萩の葉に風の音せぬ夕暮もかな

萩露

34 をく露も色そ、ひゆく朝なく花さく頃の庭の萩原

秋夕

35 ものおもふたかならはしそ秋といへはつらさに限るゆふへならしを

初雁

36 露霜のよさむのころもかりかねは越路の雪やわひてきつらん

秋田

37 住の江の松よりかけてきし田なる稲の穂浪を渡る□□風

「ウ」

衣鹿

38 秋風も身にしむ夜半に妻恋の恨をそへて鹿やなくらん

暁虫

39 あかつきの友としれはやきりくすなきてね覚の枕とふらむ

山月

「
(79・オ)

すさひ草 後編 附録

高城住吉大明神社奉納百首

頓阿法師伊勢太神官奉納題
天保十三年壬寅三月廿四日詠進

春二十首

立春

1 照らす日の光かすみてけさよりの春に和らく神のみつかき

山霞

2 あけ渡る春のうみへの浪間よりかすみてうかふ紀路のとを山

春雪

3 さえ残る去年のかたみにふりそひてつもるたかねの春のしら雪

朝鶯

4 春寒きあさけの霜のむら竹に日かけやいそく鶯のこゑ

沢若菜

5 つむ袖の雫も寒し浅氷とくる野沢の水のふかせり

餘寒

6 打とけしいはまの浪の立かへり又春さえてこほるやま川

梅薫風

7 そことなくさはれ渡る梅かゝの行ゑや風の心なるらむ

行路柳

8 ゆく人もこゝろひかれてみちのへに立よる陰や青柳のいと

春雨

9 なへて今木々のこのめのはる雨や山の緑を染いたすらん

「
(77・オ)

若草

10 霞たつ野原の日影打けふりや、もえわたる春のわか草

春月

11 佐保姫の霞の袖のはるの月涙のよそに猶くもるらむ

帰鴈

12 帰る鴈いかなる春の契より花にはつらく別れそめけん

初花

13 まつ程もそめし心の花さくら咲初る色を浅くやは見ん

見花

14 見る人もいとまある世にさく花はしつけき春にあふやうれしき

翫花

15 あたなりと花や思はん色に香にあかてうかるゝ人のこゝろを

惜花

16 おしむにもとゝまらぬ世のことはりをうつろふ花の上に見すらん

落花

17 たか里か色香にもれん桜花ちりかふ頃の四方のはるかせ

籬歎冬

18 やまふきの花のあるしよ誰□□いはぬ色香にかこふまかきは」

(78・オ)

松上藤

19 いく千世もちらてを匂へ藤の花□そふ松の色に契りて

暮春

「
(ウ)

楠田淡水の鹿野屋に移り住けるに遣はす文

嘉永二年
西十月

村時雨のふりみふらすみ定なき折から 筒井つのつゝかな

うすくくしうおはすらん事のよろこはしさよ 今は其地の御

すまゐもやをら程ふりにたれば 何くれとよろつ事たらひて

こゝらの人の御ましらひも いと、笹垣のへたてなく 檜柴のなれ

したしみ給へらん程に 里は仁あるをよしとせるとかや申すめる事

も さこそと思ひあはせ給ふへかめれ さしても山路の霞立わ

かれ侍りし後は 雲井の鴈の音信も 板底久しうかき絶て

うと濱のうとくのみなり行事のほいなうたてしや 此春

の末つ方にてや有けん 野沢の真孤かりそめの便につきて

をしかの角のつかのまにことゝひまいらせ たまゝにたいめ奉

りし事も 今はたゝうは玉の夢かとなむ たとくしうおほめか

れ もろこし人の口すさひに かの何かしを三日なん見されは

いやしき心いてくとやらんいひしも よそならす覚えて 見まく

ほり江の深くのみ思ひしたはれ侍るそかし 過し葉月の

頃ほひは 三五夜の月に向ひても あはれ同じむしろに立ま

しりて 歌や詩やかたみにつゝしりあひ侍りつるも いつは

かりの秋也けらしなと よろつ忍ふ山の忍はれて 遠き二千

里の外もへたてたるこゝちにこそ

共に見し秋は昔のおもかけも心にうつすもち月の空

となんひとりこたれしも 今更恋しさの餘りなるへし いてや

「ウ」

「(ウ・利)」

忘れ水わすれぬ御契もおはさは いさゝか言の葉草の露は

かりもめくみたまはん事をのみ 浦のしき波しきりに□□□

きすつるなり かしこ

神無月のはしめ

兼愷

楠田淡水君

御もとへ

「(ウ)」

「(ウ・利)」

すみ所まで音つれ給は、急き伴ひまいらせてん もしいさ、かの御さはりにてもおはさんには あくる十一日には必き問ひ給はん事を 田面の引板のひたすらねかひ侍るにこそ とにもかくにも御かへり事を待奉る也 かしこく

きさらきのこ、のか

逍遙舎のあるし兼愷

返し

花薬ひとつ飛來り うれしくも忝なくも急き見まいら

するに 取きの御志はさるものにて まつ夜へよりの風しつ心

「ウ」

なく こなたにても

咲そむる花とはきけとふけはまつ心にさはる軒の春風

などいはけなきまゝにいひ出せしも 此御音信にあつからんとの

しるしにや なてうさはる事の侍るへき ともかうも仰にこそし

たかひ侍らめ くはしくはたいめ奉りて かしこまりも申侍らん 穴賢

おなし九日

兼廉

鹿兒島に在し時増水壽山に答へける文

嘉永二年
西九月

玉なす御ふみのひと巻 いとく橘の香のなつかしくて はつ若菜

とる手もをそしと押ひらき侍りぬ 今や秋もふけ行夜寒の

風には いか、すぐさせ給ふらんと案し侍る折から さ、島のさ、

はりなう 安川のやすらかに渡らせ給ふ事こそ嬉しけれ 去し

最中のゆふへはれいの年よりも一きは隈なく晴渡りて 秋こ

とに同じ岩戸を出れ共 光ことなるこよひの月哉と 独打うめ

「(74・オ)」

かる、程也かし 翁は此夏の頃ほひより 世をうき物にいとひす

て、白かみかきおろし墨の衣引まとひ あらぬさまに身をさへ

かへ給へれば 今は迷ひの霧もたえ 思ひの烟もつき果て さそや

みのりの月の光に 心をのみすまし給ふらん物をと 葛のう

ら葉のうらやましくおもひやり侍るにこそ 其折よみ出給ひき

とて はるくめくみ給ふる御歌 出るより八隅の外も隔なく
おなし心に月や見るらん いともえ

ならぬすかた詞は けたかくうるはしきなと いひつ、けむも中々

愚かなるへし ことにたんさくに書流したまへる水莖の跡くれ

はとりあやしうたへなることからは やそし餘りの御筆つかひ共

覚え侍らす 老てますく壮りなる御心はへにや など打あまれ

て 磯の浪しはく打かへし 見るめにあかぬこ、ちし侍る さるを

川橋のいたつらに 水馴棹のさし置たらんも むけに物しら

ぬわさなるへしとて

「(ウ)」

塵の世をおもひ捨たる心には猶すみ増る月や見るらむ

と片腹いたうかきちらして 御かへりことのしるし計にそなへた

いまつるになん 遠つ海遠からぬ程には 旅衣立帰り侍りて 心

に思ふ乱芦のふしく共 よろつに申聞え侍りなん あなかしこ

長月末のいつか

とを 稲舟のいなめるに似て 中へたてあるさまにやお
もほし給はん さるからせん方なさの餘りに つるに毛をふき
て疵を求め 片糸の乱れかはしき□ともを いさなとりいさ、
か此奥にかきしるして をしまつきのもとにさ、け奉るになん
耳しゐたるか鐘のひ、くをわきまへす 目つふれたるかへみ
の恐れをしらさるのたくひになすらへ 我かおほけなき罪
をゆるし給ひねかし た、是唐衣のうらなきましらひに
たかはさる為にこそ 穴かしこ

楠田淡水に答ふる文

弘化三年午八月
此時濱平村に在

朝もよひきのふのたよりにことつけ給へる御せうそこ さし櫛
のさしをかす 開聞のひらきもて打出の濱の打すし侍りぬ
よろつに浅沢の浅からすいひをこせ給へる御志の程 いともく
こよなう嬉しくこそ侍れ 中にも過にし夜の望月に向ひ
てかきよせ給ひし玉藻のかすく えならぬ光さしそひて
しつたまきのくりかへして見るにあく事を覚えす 御返しに斯
なむ

名にしおふ月にみかきて言の葉の露も玉なす光をそ見る

ちりの世を逃れし宿の秋風にさそな心の月もすみよき

つゐてとはせ給へるやつかれ草つ、みもあつしきこ、ち 日に
日にいえて 今はいつしかさはやけく成行侍る 去し十五夜の比

「
(72・オ)

ほひまては いとなやみかちに打ふせり侍りて 口すさひにいひい
つる事とも、 た、是苦しさの心やりにこそ
晴やらぬ秋のおもひをいか、せん名におふ月のゆふへなからも
露わけて誰かはとはん望月の光もくもる浅ちふの庭
など打うめき侍りしも むけにをろかしきわさ也かし とかく
にをのかつか短き筆のしづくには 思ひの筋ともえもかきの
はへ侍らねは 芦垣の間近き程に 其御渡りまてまうて参
りて 何くれとつは市のつはらかに申聞え侍りてん いさ、か
御かへりことまで かくは申まつるになん

葉月中の七日

楠田淡水に遣はす文

弘化四年 未二月

あやめ田の山荘の桜 今を盛に咲出侍りつる程に きのは
なつかしき色香にうかれて花の下に日をくらし あかぬ餘り
にうた、ねのかり枕して けさなん家路に帰り侍りき よへよ
りねたましき西風に梢を分て 爰かしこ散初ぬるも むけ
に口おしき心地し侍る あすは空のけしきものとけく成ゆき
侍らん程に かならずとふらひきまさん事を せちにこひのそみ
奉るになむ 今は月の夜頃にも侍れは さきに契り申せりし
如く ひとよは柴の庵にやとらせ給は、 月も花もいと、うれし
とやおほえ侍らむ 其御心にて昼する頃ほひより をのか

「
(73・オ)

と成かはり 程も形もいさ、か疑ふへき所なし 人皆只あきれに
あきれ果て あやしきの限いひの、しる あるしの何某此さまを
見て 狐に向ひ をのれ人の内に忍び入 かひ鳥を殺せりしとか逃る
へき所なし 去なからことはり弁へなきけものを 今更罪なはんも
おとなけなし こたひまでは命を助け帰さん程に 重ねてかうやう
のわるわさ共なすへからす 急きをのれか誠の形をあらはして立去
へし と人に物いふ如くにいひさとし 籠の口をひらきければ かの鹿の
如く見えけるも 今そまさしききつねの姿になり 嬉しけに三聲
はかりこん／＼となきて いつく共なく逃去けるとかや 其比人こそりて
めつらしき事に申ふらしけるとなん 春山の狸のあやしき事いひ 「ウ
のへつるつゐてに 是をも考え出せるにこそ」と同じ人の語り聞せし

鹿兒島に在ける時上原尚貞に答ふる文

天とぶ雁の翅につたへ給ふる御文 爰にはをとつ日なん届き侍り
ぬ さきにみふち 後比良てふ山ゝに はる／＼尋ね入給ひ 柴の仮
庵のかりふしなとし給ひきとて 或は事とふ月になさけをかはし
妻こふ鹿に哀をそへ 或は夜半の嵐にむすはぬ夢をかこち
落つもる木葉に帰るさの道を分わひ 其外物にふれ折に
臨みて かす／＼かき集め給へる言の葉とも ふりはへさしおこさせ
給ひ いつれも心深く詞やさしく聞えて 真玉の光のうるはし
さは いと、目もおとろかれ侍りぬ それのうちにも思ひよるへき旨

あらは申せよかしとの仰こと 浦松のうちなきましらひに いなみ
野のいなむへうも覚え侍らねは 指出の磯のさしをかす
くものゐのかきつけて かへしまいらするになん あはれ刈こもの」
かりそめなるひまたにも 板田の橋のいたつらに打すくし
給はぬは けに和妙のたへなる御心はへ いとも／＼めてたくよ
ろこはしう覚え侍る 猶早蕨の折ゝ怠りなく まな鶴の
まなひたまはん事こそあらまほしけれ 穴かしこ
奥山のふかきあはれも数々の言葉の露にかけてこそしれ
神無月こ、のか

鹿兒島なる長野祐喬に贈れる文

天保十二年
丑閏正月

過つる日贈らせ給へりし二十首組題の御歌 あまた、ひ
手束弓の押かへし打すし侍るに いつれも珍らしくおもしろく
て いといたうめてはやし奉りぬ そか中に 難破のあしかるへき
ふしもましりたらは さしも草のさしをかす申聞えまいらす
へきのむね こまかにうけたまはり侍りぬれ共 もとより心の泉
の深きに臨みては をのれか浅はかなるうつはにて なましゐに
其底ゐをはかり見る事あたはず 詞の花のうるはしきに
向ひては 目もあやに打ゑまれて とかくに其色香のこきう
すきもわき兼侍るになむ 今はた、其俣にかへしまいらせ
てんやと思ひわつらひ侍れ共 そは山菅のねもころなる仰こ

のたれ右にもこよひ 息を限になやみ苦しむさま也 何某も母もあきれながら とかくして狸を残らず打殺しぬ さてもいやしきけもの、身として 鶏のあつ物くはん為に 仲立のさまをまねてかゝる偽をまうけなし 我等をたふらかしけるにそ有らん さるにても初より五人の詞のつかひさま ふるまひの人らしさ 衣の色さうつくしけなるなど いさゝか疑ふへきふしもあらさりしを 犬の目にはたゝちに狸とこそ見えつらめ かへすゝもむけにおろかしうはかられし事の 心にくゝもいまはしけれ とて やかて隣の者ともよひつとへ 有し事共つはらかにいひきこえ かつは怒り かつは笑ひとよみて 後にはかの五つの狸を 庭鳥のむくひよとて すへてあつ物にとゝのへ 皆ことゝくひつくしけるとなん 世にもいやめつらしき事なれはとて 此所を知給へる何某^{二階}の許にくはしう」
(69・ナ)

告聞え申けるを 其何某よりきのふ聞侍り 又はかの狸のあつ物めつらしくくひたりしといふ人の物語をも聞たるに 右のをちゝいさゝかたかへる所もなかりけり と或人の語りきかせし諸国百物語とかやいへるふみの中に 昔丹波の国亀山に 宇都宮何かしとなんいひし百姓あり をうなの子をよたりもてりけるに 姉むすめ三人は既にところゝにつきて いもうとむすめ獨なん残りぬけるを こたひ隣の何かしか許にめとるへきに定まりぬる時 狸とも偽をかまへなし 其なかたちと成 其聲と成 供人共あまた従へて宇都宮か家に來り 数々の贈り物ともそなへて あくまでさけ

肴やうのもてなしにあひたりけるか 姉むすめの携へ來りし卒都婆の杖の奇特をもて やかて其夜に見あらはされ 門の戸などさしかためぬれば のかれてんとすれ共かなはず 相むこともひしゝと取つきて なか立も聲もとも人も 皆ことゝく切殺して見れば すへて」
(ウ)

年へしふるたぬきにて有けるよしをしるしたり よくも似つかはしき事なりけり と或人の語り聞せし程に 片はしを書くはへ置るになむ

狐の物まね

鹿兒島なる高田氏の庭に ひとのは雉をこにかひて 常にいとおしみ養ひけり さるに過つる夏の比夜半はかりに いくつかよりか狐來りて ひそかに籠のすきまより穿ち入 つるに彼きしをくひ殺しぬ 其物音に人さ立さはきはせつとひて見ければ 雉はむなしくなりて このかたへの隅に一つのきつねなんひそみゐたり をのれおもひかけさるにくきふるまひ哉 明なをはからふへきやうこそあなれ夜の程はこの中に禁獄せよとて 籠のすきなときひしく引かこひて打をきぬ さてあけのあした 人あまた立よりてこの内をのそき見るに 狐はいつちいにけるやらん たゝ見も馴ぬうさき一つ 籠の奥に」
(70・ナ)

うつくまりぬけり 誰かれも打驚き さては狐の爰を逃れいてなんか為に あらぬ形をあらはして 人の目をまとはすにこそあれ あないふかしや なとうかゝひをれる内に 其うさき又いつとなく一つの鹿

やつ／＼しさにて 年頃のむすめたりながら いくにまいらすへき
 よすかもなく 是までむなしう打すくし侍りつるに しかるへき聲」^(67・オ)
 君のいまさん事 こよなきさいはい也 とよるこほひあひ侍りぬ 既に
 こよひめとるへきになむ 契申侍る程に 夜にいらはかの女を伴ひ
 来るへし と申 母はなのめならず悦ひて はやくもねき事の
 かなへるこそいと嬉しけれ さりなからよめ人といはんには かの親は
 らからなとも伴ひきまさんなれは いさゝかの酒さかなにてもそなへ
 て かたはかりたにいはひ侍りなん かゝる山里の片はつれにては その
 ようい俄にしもいてきかたければ こよひのはへ侍らはや と申 なか
 うと男打きゝて かくまつしき中のましらひに さる事かましきな
 いひ出給ひそ 何の設も入ましきなれは 内に飼置給へる所の鶏
 ひと羽を殺し そをあつものに煮て 來らん人にもてなし給へ 夜に入
 て をのれ人ゝをゐて參るへし と申かはし 彼男は立去けり 跡には
 さるへき便につきて 酒さかなはつかはかりよういして 鶏のあつ物をも
 とゝのへいて やをら日のくるゝを侍りたり 既に夜入はて、 仲人の「ウ
 男先にすすみ 彼嫁と見えつるむすめならひに其母 外に隣の
 をうな也とて 年たけたるをふたりまで伴ひ來りぬ 母と子と嬉
 しく出あひて 五人を内に迎へいれぬ かたみに何かれと語りいて、
 かの物賣のなかたちせし事 或は山住のいやしうやつれたる事
 など 共にうらもなくむつれかたらふに かの人の物のいひさま いとさは
 やかにことはり聞えて 衣のうるはしくつや、かなるは 目にたつやう

にて はしめ彼なか人のいひしにたかひ こはいやしからぬやからにてそ
 あるらん と母も今更心おとろき よろつにおもはゆき心地せせらる
 かくてよういの酒あたゝめんと 母は椎柴折ちらし 煙の火をたき
 をこすに随ひ 五人の者共何となく顔の色あやしく成て 或は身
 をそむけて庭の方を打見やり 或は面に手をおほふもありて
 柴の煙のうるさきをいとふにやと見ゆ 母は心せくまゝに 又々真
 しはを取あつめもやし立る程に 人ゝかたち打くつして いたいたう」^(68・オ)
 ものうきさま也 百姓何かしいとあやしと思ひければ そこなる
 さうし共引立んとするに 五人は顔見かはして こよひは身に
 いとふへき夜風も絶てなければ 此まゝあけ置給へ といふ 何某押
 かへして 此あたりはかひ犬ともあまた侍りて 夜に入ぬれば 家の内
 に窺ひ入 くひ物ともさかし出し侍るか 心うく侍るにこそ と申
 さもあらは いかやうともよきにはからひ給ひね と人ゝ申ける程に
 何かしはいととくやり戸さうしを悉くひき立けり 其後ひそかに
 内を出て隣の家にまかり 飼犬の四つ五つ有けるをひきぬ來り
 て はしなく家の内に追ひいれたり 犬共走り入と見えしか かしらに
 ひゝらきをれるよめに忽飛かゝり かみつくまゝに一ふりにふり
 たふす こはいかにと見やれば 今まで有つる人にはあらで 大きな
 狸也けり 外の犬共はせめくり 上を下へと騒きあへる内に 思ひ／＼
 にくひふせければ むすめの母も仲人も隣のうはも 皆こと／＼「ウ
 ふるたぬきにそ成にける かれらも逃出んとするに道なく 左に

とかくにあやしきの限也けり いとく窓の燈か、けそへて 其事
のさまをかきつゝくるに そことなき鳥の聲も さすか明ゆく空」(ウ)
をいそけるに似たり

たえず猶世々にあふかん四たひまで馴てもあかね夢のみかけは

あまた、ひ仰くにつきぬ恵哉見しは跡なき夢路なからも

右の如くかきしるして

雅光卿に奉りけるに そをかへし下されける時賜はりし御歌

詠草をかへすとて

雅光

珍らしく一度ならずこゝろあるゆめの詞を見るもうれしき

夢の言葉 五篇

嘉永二年つちのとの酉のさつき十餘りいつかの暁の夢に

飛鳥井雅光卿 をのれか宿りにいらせ給ふ事あり 急き我が

父を初め奉り 伊地知季休やつかれ 外にもひとりふたりありて

卿を拝み奉り 歌つかふまつらんとて 衣のあたらしきなど

引つくるひ さ、け物ともいさ、か取した、め 何かれと立さはき」

(66・才)

ける程に あけなむとする鐘のひ、きに 跡なく打おとろかれ侍り

ぬ いてや天保十とせの頃より 今は既に五たひの夢になん見え

させ給ふ 其事の忝けなさ いく度もくりかへしいひつゝ、けんに 詞

い□似つかはしくてえもしるさす からく案し出ける歌も 又只同し

さまなから むけには口おしう捨置かたくてなむ

和歌の浦や深きえにある五手船いつたひ神の恵をそ見る

いつて船いつたひあへる和歌の浦の神の恵^{は世々にくちせし}やまして仰かん

(一) 寛文慶應
雅光

つきせしな和歌の浦なる五手船いつたひあへる神の恵は

狸の仲たち

薩摩なる伊集院のさとの内 春山とかやいへる所の山陰に 百姓何某とて

母獨を養ひて住る者なん有ける しかるにことし 天保十餘り三の年

寅の卯月の頃ほひ あやしき事こそいてきにたれ 爰に此年比

外の所より行かひて 物うりありく男あり 常に馴ましくまし

らひけるか 或日来りて何かしか母に向ひ かはかり年老たる人の独子」(ウ)

をのみたのみにて 何くれとろうし給ふも よそなからいと心うく覚え

侍る さるへき嫁をめとり給はんはいかに と申 母打いらへて をのれも

兼て其事をひたふるに思ひくし侍れ共 かうやうやつゝしき住

居には 誰をかむかへいれ侍らんと云 物うり男のいはく さ思ひたまは、

是よりさのみ遠からぬ所に 我か相知れる者の侍り 其家にめ

とり給ふへきよきむすめこそあんなれ をのれなか立しまいらせてん

と申 母は其子にも此よし告しらせて とにかくもよきにはからひ

見給へかし と頼みけるに 男はうなづきていてぬ 其あけの日卯

月のはつか餘りいつかといへるあした かの男又來りて申やう 昨日

たのみ給へりし事共 よくもすみやかにはかりおほせてこそ侍れ

かのむすめの親共にしかゝのむね申いれ侍りしかは かしこも同し

我が友何かし和田助倍ゐたりしかは それに向ひて 只今おほそれ
おほくも

卿を初めて拝み奉りしのみならず いとしたしき仰共かうふりし
事の忝さを聞えあけ、れは

卿ふとかへり見給ひて 兼愷かけふなんいとま申といへるは へちの

事にてはよもあらしかし をのかあやめ田の山莊逍遙舎の花見

侍らんとの心なるへし と打笑はせ給ひしかは 我もいさ、か進出て

卿には□庭なる花盛をこそひめもす御覽し給はめ とたは

ふれ言申て 既に爰より退きなんとしける時 曉告る山寺の

鐘の声に 夢はなこりなく成ゆきぬ いてや過にし亥の

年十一月七日の曉と この年正月九日の夜と 今卯の年の此

曉とを合せて 三たひまで夢の中に拝み奉りぬ 年は五とせの

あひた也けり うつゝにはいまたひと度もまみえ奉らぬ物を 夢の

契のかくしはくなるは いかなるよしのいはれならんと 我なからあ

やしみ思ふにつきて 有かたさうれしさ とかういはん方なし

やかて夜もあけなは

卿のさきにたまはせし所の御筆の跡をたに いとく拝み奉ら

はや など案しめくらす程に 斯なんかうかへ出ける

あたなりと何か思はん三たひまでみかけをさそふ夢のた、ちは

ひと度はうつゝに仰くよしもかな三たひむすへる夢の契を

「
(64・オ)

夢のこと葉 四篇

弘化三年丙午の八月廿五日の夜の夢に

飛鳥井前大納言雅光卿はからすも をのれか常のすみ所に

いらせ給ふ事あり いくよりか帰らせ給ふ つゐてにこそ とて

いつしか夕つ方になりぬ 急きみつからよみ置る数々の歌 或は

あやめ田の逍遙舎の十景二十勝などの歌の巻々いつゝ、むつ

有けるを みなとうて、御前に備へ奉るに かれよ是よとつくく

見そなはし給ひ 程なく立出給はん御さまになん見えさせた

まへは 世にもは、かり多かるわさなから いやしき賤かゆふへのかれいひ

す、め奉らはやと申上る

卿きかせ給ふて そはいたうわつらはしき事そとよ 既に茶を

煮て奉りぬれば 是にてたらはせ給へり と仰たまふ をのれ押

かへして わさとししらへ出るにては侍らす をのか夕けのれうに とく

と、のへ置侍るにこそ と申ければ さもあらはまいらせよ との仰ことに

従ひ やかてゐなかなひたるうつはのあたらしきにもりて あつものともい

さ、か取具し うやくしうさ、けまつりけるに

卿打ゑませ給ひ 御心よけに受させ給ふと見て 眠は忽さめた

りき かしくもたふとき御上にて かゝるありさまなと申も おほ

それ多き事には覚え侍れ共 をのれか身に取てはかたしけなさ

うれしさ 又あるへうもなし 過つる天保十とせの霜降月の

ゆふへより 爰に至りて すへて四たひの夢になん 拝み奉りぬるは

「
(65・オ)

いほりに臨ませ給ひて拝まれさせ給ふは いかはかりの深きえにか
侍るならん そもくうは玉の夢にをけるや もとより跡かたも

なきあた物にて ましてをのれかことき癡人の是をかたりいつ

るは いとくをろかに片腹いたきわさなりといへれと ふた、ひの

かたしけなさ た、には打過かたく覺ゆれば あけの日かの

卿のさいつ頃くたし賜はりける所の御歌を壁のかしらにかけ 手」(ウ)

あらひ口そ、きなどして拝み奉りけるに 斯なん思ひつ、けし

夢の中にふた、ひあふく言の葉の道やへたてぬ光なるらん

右の如くかきしるして

雅光卿に奉りける 其年の冬十一月に

卿の御許より 京の人平在明となんいへる画師にか、せ給へる

瀧の繪に

雅 光

絲の色に千世をそかけて養の老せぬ名にも見ゆる瀧哉と

卿の御讃の御歌を 手つからか、せ給ひて 余に賜はりしかは

かたしけなさに堪すして よみて奉りける歌并詩

千世かけてたえず仰かん筆の色に老を養ふ瀧のなかれば

言の葉に千世の色そふうつしゑの瀧の白糸くりかへし見ん

寫得^シ得^{タリ} 清泉養老^{ラフ}ノ名毫端^{ラフ}ノ水勢^{ラフ} 塵情^{ラフ} 深恩^{ラフ} 殊^ニ有^リ 唾珠^ニ

賜^{モノ}ノ仰^キ見^ル光輝壁上^ニ生^{スル}ヲ

豈^{ラン}圖^ヤ冠冕青雲^ノ賜^{モノ}遥^{カニ}照^{サント}ハ 蒿萊白屋^ノ貧^ヲ錦字^ニ粲然^{タリ}千載^ノ美

金篇煥發^ス一朝^ノ珍飛泉看^ミ洗^ミ練光^ヲ潔^{ヨク}善画能^ク教墨色^ヲ新^{ナラ}

ト

「(63・オ)

養老由来人ノ所尚^{トウ} 恩波深^ク悦^フ浴^ニ 玆身^ヲ

夢のこと葉 三篇

天保十四年みつのとのお卯神無月廿八日の暁の夢に

飛鳥井前大納言雅光卿 わか

君^貴公^典の鹿兒島なるみたちにいらせ給ひぬ をのれも急き参りて

御けしきとも伺ひ奉りけるに ある板敷のあたりにて はしなく

卿に出あひ奉りぬ 思ひかけすあはた、しくて かたへにかしこまり

うやまひをれるに

卿も其上つ方に座し給ひ や、打見やらせ給ふて 汝は伊集院

兼愷ならめ ととはせ給ふ 初めて拝み奉れるに よくもしらせ給ふ

もの哉 と胸おとろかれつ、 それそいらへ申あくれば をのれいちは」(ウ)

やくも窺ひ参りつる事 又は

卿の都を立出給ひし時 御むかへにとて淀河まではるくまい

りし事とも いとく嬉しくおもほし給ふなど ねもころの仰こと

うけたまはり しはし何くれと御物語あらせ給ひ さて兼愷には

けふは此所につかへまつるにやと尋給ふをのれさせるわさとてもなく

侍れば やかて暇申てまかて侍らんと答へ奉りぬ 折しも

卿の見え給はぬは いつ方に渡らせ給へるにやと そうしをへたて

て人聲の聞ゆれば

卿はそこよりのた、せ給ふて 葦の内にいらせたまひぬ 其かたはらに

れぬうちにと そはなるた、う紙取出つ、しるし置く 其歌にいはく

数くにあたるいろの

かすく／＼に花なき色の言の葉もいさかきよせん わかの浦松
わかの浦わに
いたつらにふり行松の

右の事とも書つ、けゝるつゐてによめる

見し夢の跡ははかなき言の葉もいさかきよせんよるのね覚に

右のふみを

雅光卿に奉りける時 其紙の奥にかゝせ給ひて 賜はりける御歌

雅光

「
(61・ウ)

夢路まで心のかよわかぬ浦や松の言の葉浅からず見ん

夢のこと葉 二篇

天保十餘り二の年辛丑の閏正月九日の夜の夢に

飛鳥井前大納言雅光卿かたしけなくも をのれか家の常に

すまゐせる所に ゆくりなういらせ給ふ事あり 御さしぬきとかや

をめして座し給ふに 御供とおほしき人ひとり 御かたはらを

少し引さかりをれり をのれは御前近うかしこまりさふらひ

けるに 御歌かきて賜はるへき程に紙を奉れよ となん仰たまふ

急きそはなるふつくゑより いさゝかの紙のひと巻を取いて、

さゝけぬるに 是よりも猶廣からんこそよけれ とのたまふ かたへの

襖を押開き立入しに 我か父君のおはしければ 事のさまをつけ

まいらせて たゝう紙をこひうけ そを奉りなんとするに 片はし

に文字とかきちらしたるやうにて いと清けにも見えねは ふた「ウ

たひふつくゑをさくりて 繪半切てふ紙の三まきはかり有つる

中より わきてつやゝかに色とりしひと巻を かの

卿に奉りぬ 是にてよろしく見ゆればかゝせ絵ふへきそ と仰こと

あり をのれはやかて次の間にはせ行 我か母のいませるにまみえて

かゝる有難き事こそ侍らね

卿の初めていらせ給ふに 酒さかなやうの物備へ奉らはや と申

母もこよなうよろこひたまひ 折しも爰にあさけき魚のあなる

こそ幸いなれ いさ酒のよういすへき などもろ共に立騒きつ、

たちまち眠は打驚きぬ されは世にもたふとき

卿の御かたちを 拝み奉るのみならず なきふた親のみかけまで

共に目の前にあらはれ給ふは あやしめつらしと云も更也 いか成

事のさとしにやと思ひまとふに いとゝうれしさも肝にしみて そら

恐ろしき心地す をとゝしの霜月頃の夢にかの

「
(62・ウ)

卿の御殿にて 和歌の御會有けるに参りて 言の葉もいさ

かきよせんといへる歌よみつる事あり いてや過にし文化十餘り

三の年子の秋の頃ほひ かの

大納言卿をやまと歌の道の師とたのみ奉りしより 今は既に

はた年餘りいつとせはかりもへにたるやらん 一たび初草のは

つかにたにまみえ奉る事はなかりし物を さきにはうち日さす都の

かしこき所にのほりて拝み奉り 今は山賤のいやしきをのれか

瀧つ浪くたくは人のこゝろそと早川の瀬の神もあはれめ

新御堂村の市太郎か墓に誌せる詞

市太郎は新御堂村なる土民市左衛門か子にして いとときなきよりよく順也 萬の事とも常に父母の教に背かず 父母も行末いと、頼深う愛しはこくむ 天保四年 其齡わつかに六歳に成ぬる秋の頃 市左衛門をこりのやまひに煩へる事あり 一日熱おもく 渴の甚しきに堪かね 水をのみて 其苦しみをやすめんか為 市太郎をして かたへの井の水を汲しむ 市太郎急き其旨に従ひしか 誤りて井の中に落いり 忽溺れてはかなくなれり 父母のはらわたをさくの悲しひ 何にかたとへん 其詳なる「ウ」は人みなしれる所なめり 余よそなから聞に忍ひす つるに拙き詞をもて おさなき者の 父の為に身を捨ける事のさま片はし書のへしに わか

公貴典 見そなはし給ひ 下を憐れむ御心の餘りに 忝くも詩

を作りて 是をいたませ給ふ 其外或は和歌を詠し 或は詩を賦するの輩 いと少からず これをのつから 童子孝順の至誠 人の心を感じせしむるにあらずや 余是を集めて一卷となし なつて孝感餘編といふ 府城の教授市来先生を始め たれかれの序跋の文など数々あり ことし天保十年亥の八月 七回の忌に當りしかは

公又龍福院の内なる市太郎か墓に するしの石を建させ 僧

ともに仰せて 懇に追善の供養をなさしむ

おほん恵の程いはん方なし 則其石に事のゆへをえりつけて かの孝」感をもあまねく邑中の人にもしらせ 遠く政教を助けんと

おもほし給ふ やつかれ其仰ことを承はり 斯なん書しるして 石にきさましむる所也 されは童子の令名長く朽すして 公の仁徳 世々に仰くへきものならし

あはれいかに苔の下にも仰くらんかゝるは深き露の恵を

天保十年己亥八月

伊集院兼愷書

夢のこと葉 初篇

天保十の年亥の霜月七日の夜の夢に

飛鳥井大納言雅光卿の御殿にて 和歌の當座御會の有

けるに 参りて歌つかふまつれる事あり 外にもみたりよたり

さふらひて とかくに案しける時 をのれか三四の句に言の葉も

いさかきよせんといへるはいてきながら 外の句とも二つ三つありて

かれよ是よと考へまとひける折から 今は皆々よみ出つらん

「ウ」

□に御清書したまふへきぞ との仰ことうけたまはり 心いそかはしくなりて ふと眠はさめはてぬ 残のともし火いとほのかなるにのたまへる御聲は猶耳にとゝまり 御姿のたふとさもまのあたり

に拝み奉るこゝちなんして あやしくも有かたう覚えければ わす

すさひ草 後編 卷之七

文之部

高城村に水神の祠を建るの記

弘化四年の年ひのとの未の六月はつか餘り三日となんいへる日

の昼過る頃ほひより うしとらの風いとかめしうのわき立て

まこちになり たつみにかはり いやふきに吹あれて あくる四日の夜

にいりて やうやくにしつまりぬ かゝるけしきのおとろくしきに從ひ

雨しきりに降きほひ ふつかみよはかりか間は しはしのをやみたに

あらず 川さの山水落増りて 中にも熊原山の奥より流れ

出る大川なん いと、こよなうあふれ来□て 岸をくつしつゝみを

そこなひ行まゝに 高城村なる今河原てふうしろは 水の勢ひ

いよ、瀧なして 人居のかこひの垣根まで 川筋うかち入 上こす

水に洗はれて 多くの家とも或は傾き 或はたふれ 誰しも既に」

(58・ナ)

溺れうせなんする事よ と心も空に恐れ悲しひ 年わかき者

とも老たる親を助け いときなき子を抱き からうして隣の椿山

といへるに逃れいてぬ そか後に至りても かくてはつゐに是か為に

流れ亡ひん外はあらし と皆いといったう危ふみあひて 今は住つく

へきこ、ちもなくなん成にたり 下津流本城村むつ田の前わ

たりは こゝらの田を破り 畠をうめて 人の歎とかういはん方なし されは

君の為国の為 此儘さし置へきにあらねは 兼てそれらの事を

司とりて預り知れるたれそれ 青澗の深くはからひ 秋の花野

の色々にあけつろひて かのわさはひをのそかんには 今河原

とむつ田とのあたりの南さまに 河原をはるく堀ひらきて 川

筋を改めかへ そこにせきいれ流してん といふ

君にもつはらかに聞えあけて 文月の廿一日に事始して 日ごとに

多くの人草をかり催し こへていく千さの数にも餘りぬらんか

(ウ)

誰かは是をつとめさらんと 我先にきそひ進み 明るを遅しとかの

河原にはせつとひ 照日のあつきをいとはす ふる雨のいみし

きをもくるしとせず いさこと石とをはこひすて、 廣くあはき

かくさらえ 長きぬせきをあまた所にせきかけて ちからの限はけみ

営みける程に 同じき晦日の日までの間に 其いさをしことくく

なれりける 新たに堀とほせる川の流 おほよそ五町にはすきぬ

とそいふなる いとくたやすからぬわさのかく怠りなうすみやか

なるを 人こそりてめてはやしぬるとなん をのれも其事にいさ、か

たつさはりて 日数あまた行かひつゝ、 さまぐくに見もしき、もし 共

ともにばかりける輩 いと少からず つゐに其人ととかたらひ

合せて 瀬戸口の渡の南の堤に 新しく水神のほこらをあか

まへ祭り こたひかまへなせる事とも 管の根の長くもかひあり

て 水のさはりのなからんやうにと 賤か小田のひたふるにねき

(59・ナ)

奉るになん 其ゆへよしを 後見ん人の為にとて いさ、小川のいさ、

かかきしるしをけるにこそ

行水の神まもらなん何事も道ひく方に治まれる世を

1680 へたてなくともなふ宿のよろこひを世々にかさねん鶴の毛衣

平佐の北郷松翁君八十八の年の御賀に 鶴遐年友と

云へる歌をこひ給ひける時 よみて奉りける

1681 立なれてみきりに千世やよはふらん君かよはひの友つるの声

阿久根の桑波田何かし 八十の年の賀に歌をこひければ

よみてつかはしける

1682 ゆく末もかはらぬ宿になれく契やかはす千世の友つる

君の前栽の菊花さかりなる頃ほひ

姫君うまれさせ給ひければ よろこひ申てよみて奉りける

1683 千世かけてさかへん菊の色こくも花さく宿の秋はつきせし

若君の元服天保十年
己亥九月せさせ給へるを いはひ奉りてよみ

て奉りける

「ウ」

1684 末長き千世のさかへを今日よりは初本ゆひにむすひこむらん

天保十餘り三の年寅の十一月十二日伊勢物語の

御傳授せさせ給ふへきとの

みことのりを蒙らせたまふるよし

飛鳥井前大納言雅光卿の御許より仰下されしかは 其

事を祝ひ奉りてよみて奉りける

あきらけき我か君か代に敷島の道のをしへや光そふらむ

右のあくる年卯の長月閏九月
廿五日

みことのりによりて

禁裡御所にて古今集傳授し給ひける事を

雅光卿より仰下されしかは 祝ひ申てよみて奉りし

1686 世々かけて猶やさかへん古へを今に傳ふることの葉の道

古へを今に傳ふる敷島の道やたえせぬをしへなるらむ

弘化二とせの春の頃ほひ 海老原氏我が国の内なる

さとくあまねく行めくり いともかしこき

国の守の仰をうけ傳へて 士民のことわざ共おのゝ意

なくはけみつとむへきさま いとねもころに申さとし給へる

を承はりて 心の中に思ひつゝけゝる

1688 道々のをしへたゝしき国の風民の草葉やみななひくらん

1689 たれもみなあふけ三国の四の民身の程々にもれぬめくみを

「ウ」

「ウ・ナ」

1661 つきせすもいやさかへゆく世の人のこゝろをたねの言の葉の道
 1662 四の時もゆき、たかはし君か代は五つの常の道すなほにて

寄山祝

「ウ」

1663 亀^此の上^国のためしにひかん亀の尾の山はうこかぬよろつ代まで^もに
 1664 みつき^{ヒビヒ}する船路もやすき四の海や白波^風た、ぬ世は静にて

旅祝言

1665 誰も今ゆき、やすかる旅路とや関の戸さ、ぬ世を仰くらし
 1666 道ひろく治まれる世はゆたかにもおもひたつらん旅のころも手

飛鳥井家月次御題に 寄竹祝言

1667 いくよ、もかけてかはらし呉竹の直きをまゝにおひしけるかけ
 1668 常盤なる御垣の竹も君かよの長きためしにいやさかふらむ

寄松祝

1669 言^葉の葉の道^葉も幾世の年なみをかけてふりせぬわか^ものうら松
 秋の頃をのれかすみ所を爰かしこ改め造りける時 人々を
 1670 むかへて歌よみけるに 松契千秋
 「(55・オ)」

1671 移しうへて千年の秋も色かへぬ松に契らん宿のゆくすゑ
 露霜にかはらぬ色の幾千秋さかへをちきるやとの松か枝

天保十四年卯の五月半の頃ほひ

飛鳥井前大納言雅光卿六十の御賀宴せさせ給ふとて
 松契老齡といへる御題を賜はり歌めされけるに よみ
 て奉りける

1672 松かえのかはらぬ色をためしにて老のよはひも萬代や經ん

町田再遊七十の賀しけるに 讀て遣はしける

1673 な、その後のよはひをまつかえの千世の榮へに猶や契らむ

弘化四年末の九月二十五日の暁 夢の中によみいて

ける歌

1674 相生のをしほの小松移しうへて今より後の千世やちきらん

天保十年亥の卯月半の比 兼倫か都にのほりける時 「ウ」

飛鳥井雅光卿の御殿に参りて 和歌の御門入申けるに

寄松祝 雅光

1675 深緑木たかくむかふ玉松は常盤に千世をそふ光かな

といへる御詠歌をくたし賜はりしを 掛物につくらせて

持帰りければ 其よろこひにたへす 急き友とちを迎へて其

事とも祝ひ侍りけるに よめる

1676 とことはにつきぬ言葉の玉松は仰くにつけて光をそそふ
 1677 世々かけてたえぬ光やあふかましみかく言葉の露の玉松

右の折 安山親敬も同じ伴ひなりければ

寄鶴祝 雅光

1678 歡喜のちきりとあそふ友鶴は心へたてす千世よはふ聲

といへる御歌をかきてたまはりけるとて見せければ 其事を

いはひてよみてつかはしける

1679 千世よはふ契はつきしわか^もの浦のなみにもあらぬ友鶴の聲
 「(56・オ)」

同じき住吉社奉納哥に

1632 住吉の岸にふりぬる松かえはいく年なみをかけてへぬらむ
 1633 花鳥のいつはあれとも住吉の海邊のまつや春のひとしほ
 1634 浪によるみるめのとけし松か枝のけふりもかすむ住吉の浦
 1635 友つるも馴てやこゝに住吉の松ふくかせに千世かはすこゑ
 1636 すみ吉の浦の松かせかみさひてしつえにかくる浪のしらゆふ
 1637 神垣は木間にふかき住吉の松もいくよの年たかきかけ
 1638 住吉の松の老木の陰ふかみうへけん神の其世をそおもふ
 1639 かたそきの霜もいく世かすみ吉の神の井垣の松そふりせぬ
 1640 あふくその神代の跡もみつかきの久しくなりぬ住吉の松
 1641 手向草かれすもたのめ住吉の濱松かえの千世のめくみを
 1642 住吉の神のいにしへ仰くにも宮居の松そ猶いやたかき
 1643 神こゝろふかくも守れ住吉の松のこと葉の道のさかへを
 1644 飛岡天神宮に 梅桜松の三十首哥奉りける時
 1645 神垣の世々にさかへん梅さくら咲そふ花も松のみとりも
 1646 同し宮居の前に 梅と桜とのふた本を植て奉りける時
 1647 うつしうふる宮居の花よく春も神の恵に色香そはなん
 1648 祝
 1646 しつけしなむそし餘りの国の風ともにやはらく萬代の聲
 1647 ちよ八千世猶ゆく末も長からん豊芦原の国のさかへは
 1648 あめつちと共に動かぬ中津国けにうらやすの安らけき世は

(53・オ)

春祝

秋祝言

1649 春風にこほりとけゆく河浪ものとなる世の聲あはすらし
 1650 ゆたかなる秋の田面の稲むしろしく物もなきたからとや見ん
 1651 曇りなき月も名におふ秋津国いく萬代をかけてすむらむ
 1652 高城住吉社に奉りける哥の中に 寄日祝
 1653 もろこしもれぬ光やあふくらんてる日の本の明らけき世は
 1654 月十三首哥の中に 寄月祝言
 1655 いく千秋かはらて空にすむ月やあきらけき世の光見すらむ
 1656 寄雨祝
 1657 民草もうるほふ国のいく千年十日の雨も時をたかへす
 1658 寄神祝
 1659 すみ渡る月もいく秋いは清水たえせぬ神の光そふらむ
 1660 いすゝ川下つ岩根の宮はしら動きなき世は末もつきせし
 1657 寄国祝
 1658 千早ふる神のさつけし昔より世々に傳ふる国はうこかし
 1659 飛鳥井家月次御題に 寄都祝言
 1660 治めしる君か都の時つかせ八島の外の浪もきこえす
 1658 明らけき世々の雲井の月も日もひかりやみかく玉敷の内
 1659 寄道祝
 1660 月も日もひかりやそふる玉はこの道のをしへのくもりなき世は

(54・オ)

1606 今^レは世の苦しき海を出る身に深きえにあるのりもとむらむ
 1607 法の月うつすこゝろもくもらしな浮世のちりをはらひ捨ては
 かへし 八十三翁自空 氏輔
 1608 捨やらぬ老の身にさへ世中を夢と覺てはあとかたもなし
 1609 苦しとて世をうみ渡る身ならねと御法の舟を求めこそすれ
 1610 そむきしと人や見るらん同し世にすめ共かくて姿かはれは
 神祇
 1611 朝ことの鏡の中にあふき見よくもらて照らす神のこゝろを
 1612 やす国□たいらける世は八百萬神の守りの末もかはらし
 1613 目に見えぬ神のみかけよ仰く其心の中を照らすとはしれ
 秋神祇
 1614 秋ことに流れてたえぬ石清水いけるをはなつ神のめくみは
 寄月神祇
 1615 いはし水すめるを神の慮とてやとれる月も世々に曇らす
 1616 世をてらす月のみかさの山高みもらさぬ光さしてあふかん
 寄神神祇
 1617 守れ猶神のみむろの榊葉のしけきめくみはときはかきはに
 伊勢
 1618 出る日のつきせぬ世を仰くにも天てる神の光をそしる
 1619 神風や内外の宮のへたてなくやはらく国を世々守るらし
 石清水

1620 いく千世とさしてもいはしいはし水絶すもまれ国のゆく末
 加茂
 1621 もろ人^ものへたてぬ^心恵^すあふくらし上^{わけ}と下^{いか}との加茂のみつかき
 神祇の題を探りて歌よみける時 春日
 1622 春の日の名におふ光^光やはら^あけて神^はやのとけ^かき世をまもらん
 稲荷
 1623 みな人の仰くも高いなり山ねかひをみつのともし火の影
 住吉
 1624 とこととはに神もまもらん住吉の松のこと葉の道のさかへを
 1625 言の葉の道さかふへきためしとは神そしるらん住吉のまつ
 貴布祢
 1626 きふね川たえぬ恵^水を世^上に^あふ^くかけて祈りそわたる浪の白ゆふ
 玉津島
 1627 和歌の浦にみかき^くそ^光ふらん玉津島神^はのて^へらせる道^此の光^{しる}は^世けり
 社頭
 1628 くみてしる恵も深し五十鈴川濁りなき世は末もはるかに
 1629 世々かけて猶や祈らん神垣にひくしめ縄のたえぬめくみを
 天神宮奉納哥の中に 社頭松
 1630 かはらしな一夜の松の千世かけてあふく北野の神のみ^まか^もきは
 高城の住吉社に百首歌奉りける時
 1631 住吉の神そさかへを守るらんうへけん松のことの葉の道

序品 如是我聞

1590 かしくしなときをく法もさまくになにた、われきくといひしをしへは

方便品 若有聞法者無一不成佛

1591 長き夜の夢驚かぬ人もあらし鹿のその子のあかつきのかね

授記品 無有魔事

1592 雲霧もなにかへたてんわしの山た、ひと筋におもひいる身は

五百弟子品

1593 から衣おもひかへしてこゝろみようらめつらしき玉のひかりを

1594 こゝろからおもひかへせる唐衣うらなる玉も光をやそふ

人記品 我願既滿衆望亦足

1595 待いつる驚のたかねの月はれて法の光を皆あふくらむ

提婆品 經於千歲為於法故

1596 いく年か身のくるしさもつもりきぬ法の薪のこりはてすして

壽量品

1597 わしの嶺にすめるは深しのりの月春の半に雲かくれして

普門品

1598 なへて世を救ふちからのさまくゝにわけてもつきぬ誓なるらし

同 心念不空過

1599 おもひいるふかき山路の末つゐにわしのたかねの花も見るへき

勸發品 作禮而去

1600 帰るさの袖の色香も深からんみのりの花の陰にわかれて

南林寺に尾張の国のすけ来りて 多くの人を集めて

法華經とき聞せけるに まかりて

1601 誰もみな心にふかくうつし見よ妙なる法の花の色香を

心翁寺にて 源量和尚の無門関といへるふみをとき聞せ

ける時

1602 有無をわけも迷はしのりの門こゝろにふかくおもひいりては

大乘院にて 或僧の密宗の灌頂とかやおこなひけるを

見て

1603 法の水流を世々につたへ来てふかきをしへの道はたえせず

水無月末の三日の夜 南林寺の六月堂となんいへるに詣

つるに 参りつとへるもろ人の行かひ所せけにて道もさり

あへす 御寺の中はさら也 遠きいち町のちまたの末に至る迄

左りみきりにかけならへたる燈籠は いくち、の数にも餘り

ぬらん かのはる、夜の星かと云へきたくひは物かは 是そみな

人の手向に備へ奉れる心なるへし されはあまねき御恵も

いとたふとく覚えければ

1604 ともし火の仰くにあまるかすくもつきぬ佛のひかりをやそふ

増水氏輔八十の齡を過けるか ことし嘉永ふた年の夏

かしらおろして世を捨けるさまになん聞えければ よみて

つかはしける

1605 梓弓やそしの夢もさめぬらんものさとりにおもひいる身は

1567 みち／＼をならひし跡のしたはれてひと方ならぬなけきをそゝふ
 1568 玉の緒のをはり乱れぬ其きはに長き眠のさむるをやる
 1569 ふかくのみたのみし事の数ゝもかひなき今のなこりとそなる
 1570 きさらきの末つ方 宮原景香か妻にくれける時 よみて
 つかはしける
 1571 常ならぬ春のあらしやかこつらんかはせし枝の花のなこりに
 かへし 景香
 1572 常ならぬ春のあらしにさそはれて散にし花のなこりおしけれ
 其なき跡にいとときなき子のふたり有けるか 悲しひけるさま
 を見て 景香に申遣はしける
 1573 花ちりしなけきのもとに若草の残る二葉は見るも露けき
 返し 景香
 1574 花ちりて残る二葉の若草にあはれをかくる朝ゆふの露
 上原尚貞か祖父の思ひに侍りける時 卯月朔日更衣の
 あしたによみてつかはしける
 1575 ぬきかふるならひもわかし夏かけてしほれきにける藤の衣は
 川上親暁母の思ひに侍りける時 八月十五夜月のいとあか、
 りけるにとふらひまかりて よみて遣はしける
 1576 名にしおふ最中の月も何ならし心のやみのふかきゆふへは
 月もさそあはれとやおもふ藤衣はらはぬ袖の露をとひ来て
 安山親直か同じ思ひに侍りける時 九月十三夜に訪らひ

(48・オ)

1577 まかりて
 1578 晴やらぬおもひよいか長月の月には名におふゆふへなからも
 1579 この秋はふた夜の月をなかくても千々に悲しき物おもふらむ
 なき影を忍ふる宿の夜半の月よその袖にもくもりかちなる
 1580 釋教
 1581 なへて世をあまねくてらす月も日も仰く佛のひかりとか見ん
 1852 法の道こゝろの外に有そともおもふやつゐの迷ひなるらむ
 世の人のまよふこゝろの中にこそまよはぬ法の道はありけれ
 1583 寄月釈教
 1584 うつし見る心の水し濁らすはいつくものりの月はくもらし
 1585 寄雲釈教
 1586 はかなしや浮たる雲の目の前に有や無やとまよふ心は
 般若心経 不増不減
 1587 月かけの満るかくると見えなから本のすかたは空にかはらす
 同 色即是空々即是色
 1588 くみてしれ緑の池と見えてしもすめは色なき水のこゝろを
 1589 むなしとも思ひなはてそ大空のみとりに見ゆる色もこそあれ
 法華経の心を
 法華経の内をあまた題にわかつて人々歌よみける時

(49・オ)

(ウ)

1528 和歌の浦のなみくならぬ恵をは世々にあふかん松の言の葉
 1529 おもひきやあたる夢のことの葉に深き恵の色そはんとは

天保十二年辛丑の正月九日の夜の夢に

飛鳥井雅光卿かたしけなくものをのが家にいらせ給ふと見
 たりける時 其さまをふみにかきしるしける奥に

夢の中にふたゝひ仰く言の葉の道やへたてぬ光なるらむ
 「(45・オ)

天保十四年癸卯の十月廿八日の夜の夢に

雅光卿わか

君貴典公のたちにいらせ給ひ をのれもそこに参りて拝み奉

ると見たりける時 其さまをふみに書しるしける奥に

あたなりと何か思はんみたひまでみかけをさそふ夢のたゝちは

ひとたひはうつゝに仰くよしも哉三度むすへる夢のちきりを

弘化三年丙午の八月廿五日の夜の夢に

雅光卿をのか常のすみ所にいらせ給ふと見たりける時

其さまをふみにかきしるしける奥に

たえず猶世々にあふかん四たひまで馴てもあかぬ夢のみかけは

いくたひも仰くにつきぬ恵かな見しは跡なき夢路なからも

右のふみとも

雅光卿に奉りけるに かへし給ふとて賜はりける御歌 「ウ」

雅光

1535 珍らしく一度ならずこゝろあるゆめの詞を見るもうれしき

といへるを賜はりければ かくよみて

雅光卿に奉りける

1536 仰くにもあまる恵の露そゝふはかなく見つる夢のこと葉に

嘉永二年己酉五月十六日の暁の夢に

雅光卿をのかやとりいらせ給ふと見たりける時 其さまをふみ

にかきしるしける奥に

1537 和歌の浦や深きえにある五手舟いつたひ神の恵をそ見る

1538 五手舟いつたひあへる和歌の浦の神の恵やさしてあふかん
 「(46・オ)

「(46・オ)

1539 つきせしな和歌の浦なるいつ手舟いつたひあへる神のめくみは

無常

1540 はかなしと見るらんも朝顔の花にやとかる露の身そこれ

1541 ちる花も落る木葉もあたらし盛待あへぬ人のうき世に
 「(46・オ)

去年の冬

仙洞崩しさせ給ひて ことし天保十餘り二とせの

元日は 天下諒闇なりければ

1542 かきくらす心のやみのあめかしたわかしなけふの春のひかりも

1543 いづくにもたつや名のみ春ならん雲井のやみの晴やらぬ世は

父のなく成給ひて後七年に当らせ給ひける夜 月を

見て

1544 なゝとせの袖の涙におもなれてみかけをさそふ夏のよの月

1511 老の浪まなくもみかく和哥の浦の玉とはいと、光そひぬる

懷舊

1512 なくさめてかたりあはせん友もなし年へぬる身に残るむかしは
1513 今さらにおもひ出ても甲斐そなき身のいたつらにすぎし年月
1514 夢とのみすきし昔を今更にうつゝ、になしてなと忍ふらむ

天保十一年庚子の秋の八月廿日 故京極黃門定家卿の

六百年忌に当り給ひぬるとて 平佐のあるし久祇君

より題をたまふて歌をこひ給ひければ よみて奉りける

月前懷舊

1515 おもひ出る昔の秋の面かけを月やはつかに猶残すらむ
1516 したふその秋もいく世か敷島の道のひかりを月に仰きて

八月廿日の夜 家の當座會に 秋懷舊

1517 雲霧のをくらの山の秋の月しのお昔のかけもこひしき

1518 むかしおもふ袂の露にうつりきて秋のはつかに残る月かけ

天保十とせの弥生

景德公三十三回の御忌の日に御追善の爲にとて 我

君貴典公 心翁寺にて詩歌の御會せさせたまひける時

懷旧夢といふ事を

1519 今さらにはかなくしたふなこり哉みそし餘りの春のよの夢

ふく山となん云へる所にて

大安公の御石塔を拝み奉りける時 むかし永祿の比はひ

此所のたゝかひに

かの君むなしく成給ひし事共 よろつ思ひ出られて

1520 嵐ふく山路の露も身にしみて昔をおもふ袖そしほるゝ

1521 松にふく山風もうしいにしへのときのさはきの跡を残して

心翁寺にて

大安公の御牌前を拝み奉りける時

1522 うかりける秋は昔の遠けれとしのふにつきぬ袖の上の露

夜夢

1523 そことなくよるの心のうかれゆくしるへや何の夢のかよひ路

1524 たのまれぬうつゝのやみはよなくの夢より猶やはかなからん

天保十年己亥の十一月七日の夜の夢に

飛鳥井大納言雅光卿の御殿にて和歌の御會有けるに

参りてよみ侍りしと見たりける歌

1525 かすゝに花なき色のことの葉もいさかきよせん和歌の浦松」(ウ)

右の事ともかきつゝけしつゐてによめる

1526 見し夢の跡ははかなきことの葉もいさかきよせんよるのね覚に

右のさまをふみにかきしるして

雅光卿に奉りければ 其紙の奥にかゝせ給ふて賜はりける

雅光

1527 夢路まで心のかよふわかか浦や松の言のは浅からす見ん

右の忝さに よみて奉りける

1486 かきくらすおもひをせめてなくさめよなれしむそしの秋夜の月

寄霜述懷

1487 ふみ分てつかふる道の朝霜もよもきの髪にふりそふはうし

寄山述懷

1488 世をうしと何なけくらん今はた、かくれん山をもとむへき身に

寄河述懷

1489 老浪は身にそ教そふ山河のはやくの事は立もかへらて

寄浦述懷

1490 なにはなるなにかうらみんよしあしもかはるにやすきよの中そかし
1491 よしやた、身のつたなさもうらみしなにはの芦のかりそめの世は

獨述懷

1492 をろかなるうき身ひとつやかこたまし君の恵のへたてなき世に」
1493 身の科はこゝろひとつの怠りに恥もつらさも数そふはうし
(42・才)

老後述懷

1494 世のうさはかはらて年をへぬる身に堪ぬや老の涙なるらむ
1495 かすくの君かなさけのつもる身にかさなる老の年月はうし
1496 なれて見るか、みも今はおひぬとや昔の影のとをさかるらむ
1497 はかなしやむそしもあたにすきの戸のあけぬ暮ぬと送る月日は

寄夢述懷

1498 けふとてもはかなき夢の世中にあすのうつゝを何かたのまん
1499 はかなくもきのふを夢とたとる哉けふのうつゝも頼まれぬ世に

述懷非一

1500 袖の上もひと方ならぬなみたかな身のうき事をかそへいて、は
1501 世をなけき人をうらやむ涙にや左り右りに袖もぬるらむ

述懷多

1502 身ひとつにつもるおもひのかすくや千々にくたくる袖の上の露

長月の比 重くやみふせりて久しうこもりゐける時

1503 秋のよの長きおもひは数そひて鳥のねまたぬあかつきもなし
1504 夜なくの寐覚の後に待なれつ物おもふ宿の庭鳥の聲

同じき頃の寐覚に思ひつゝける

1505 秋深き夜半のねさめのたひくにかくて思ひの数はそふらん
1506 あけかぬる空こそうけれ秋夜の寐覚の後の長きおもひに
1507 ともし火の外にはむかふ友もなし長き夜かこつ秋のねさめに

或人冬の半より足のいたはりにやみふして 明る春の睦月
まで出もやらさりければ たはふれによみて遣はしける

1508 雪の中にしほれふしたるあしの葉もおひ出る春に成にしものを
増水氏輔か老て後 いさ、かしさいの有ける時

1509 分るにも君かしおりをしるへにてふみそめにける言の葉の道」
と申贈りければ 返しにつかはしける
(43・才)

1510 わけそめし心かはらていつまでも共にふみ見ん言の葉の道
同じ氏輔か八十の齡に余りて 多くの歌共かきつけて
見せければ かへし遣はすとして書そへける

商山四皓

1468 明らけき都の月に立馴^んよあきの山路をすみすて^る身は

或人 もろこしの七のかしこき事共申聞せける時

1469 言の葉にきくもかしこし唐人のはやしの竹のよに残る名は

浦島子

1470 しら雲のはかなくもあるか浦島の跡なき浪に立かへる身は

1471 水の江に立歸りても浦浪のあはれはかなき身の果はうし

王昭君

1472 見すしらぬよその雲路の月ひとりこふる都の面影そたつ

君の國香亭にて 人くをめてして歌よませ給へりける時

多くの題とも分ち賜はりける中に

劉玄德三顧艸廬といへる心を

1473 三たひまてわくる心や深からん草のいほりの雪のした道

難破戦記夏陣の心を

1474 そよさらに乱れてさ^{そひけり}はく夏刈のなにはの芦のことしけの世や^は」^(ウ)

伊地知季虔身まかりぬる後 其家に世々傳ふる所の天流と

なんいひて鎗刀やうの物つかふへき手業を 我か

君^{貴典}公にことく授け奉るへき旨 申遺し置ける

に従ひ 其子季休より こたひ天保十餘り三とせといへる

寅の冬 残りなく

君に傳へ奉りける時 季虔か事さまくねもころなる

仰こと侍りければ 季休に申つかはしける

1475 折にあひてさこそは苔の下にても埋もれぬ名をうれしとおもはん

1476 さかへゆく末もはるかに世々かけて家のをしへの道はたえせし

右の事にやつかれもあつかり侍るによりて 其日

君より忝き仰共かうふりて 賜ものかつけ給ひければ

御かたはらまでよみて奉りける

1477 うれしさも身に餘りぬるけふなれやもれぬ恵の露深くして[」]^(41・ウ)

其後 季虔か墓に おおそれ多くも

君の臨ませ給へるとき、て 忝さにたへす 斯なんおもひつ

つけける

1478 なき跡を忍ふもふかし袖の露草の原までかゝるめくみに

述懐

1479 つゐに身は捨かたき□□知なからいとふや何のこゝろなるらむ

1480 ひと方に世をうき物といとふかな身の愚かさはおもひはか□て

1481 我なからおもふにたかふ心もて人をも世をもなになけくらむ

1482 たれも皆こゝろみかゝん朝なくむかふかゝみのくもりあらしと

1483 ひと方におもひなわひそうき事も又嬉しさにかはりゆく世を

寄月述懐

1484 なへて世はさはりかちなることはりを月にそかこつ浮雲の空

六十の齡に成ける秋 いさゝか思ふ事共の有ける比 月を見て[」]^(ウ)

1485 あかなくにやとし馴ぬる袖の月むそしの秋のあはれをもしれ

- 1443 末川君のけくらの別荘に参りける時
四の時千里をかけて海山のなめはつきし宿の明暮
飛鳥井家御題に 朝夕眺望
- 1444 浦島もあかてそむかふ朝な夕な汐干汐満かはるなかに
にきはへる色こそ見ゆれ遠近の里の烟の朝け夕けは
「
ウ」
- 1445 浦島もあかてそむかふ朝な夕な汐干汐満かはるなかに
にきはへる色こそ見ゆれ遠近の里の烟の朝け夕けは
「
ウ」
- 1446 立霞む雲のよそ目も色そひぬ花さくころの春の山のは
のとかなる風は桜のほひにて花にかすめる此頃のそら
同じく 河眺望
- 1447 立霞む雲のよそ目も色そひぬ花さくころの春の山のは
のとかなる風は桜のほひにて花にかすめる此頃のそら
同じく 河眺望
- 1448 すむ里のけふりの末もほのくとあけはなれゆく淀の河つら
朝日山あくる光にはれ渡る八十字治川の水のうき霧
高城の住吉社奉納哥に 海眺望
- 1449 夕浪のみるめのとけし住吉の浦のむかひの島もかすみて
飛鳥井家月次御題に 海邊夏望
- 1450 夕浪のみるめのとけし住吉の浦のむかひの島もかすみて
飛鳥井家月次御題に 海邊夏望
- 1451 よる浪も袖にす、しき夏衣ひもゆふ塩のみの濱かせ
る鷺もつはさ□くれぬ夏刈の芦邊す、しき浦の夕波
同じ御題に 夏望
- 1452 夏刈のみるめもす、しき夏衣ひもゆふ塩のみの濱かせ
る鷺もつはさ□くれぬ夏刈の芦邊す、しき浦の夕波
同じ御題に 夏望
- 1453 浦島もあらはれ渡る五月雨の晴間す、しき浪の夕なき
同じ御題之中 冬望
- 1454 浦島もあらはれ渡る五月雨の晴間す、しき浪の夕なき
同じ御題之中 冬望
- 1455 雲はらふあらしもさえて山のはの時雨の跡そ雪になりゆく
同じ御題之中 冬望
- 1456 むら時雨はる、沖津に嶋もりのけふりもさひし浦の夕坪
望遠帆
- 1457 真帆にうけ片帆にひくもおひ風を手をまかせたる沖つ船人
追かせの心やかかはる沖つ船まほもかたほもひきくにして
漁火
- 1458 蟹小舟漕ぎえてゆくゆふ波に又あらはる、沖のいさり火
釣父
- 1459 やすけなき身そうら浪にうけ縄の長き日くらしかへるつり人
楠田氏の手つから釣得し所よとて あさらけき魚を贈
られし時 申遣はしける
「
ウ」
- 1460 つり得たる魚の住てふわたつ海に人のなさけの深さくらへん
樵夫
- 1461 分かよふ山又山にくるしさのましかるおの道そいとなき
谷樵夫
- 1462 うきわさもなる、きこりの心には谷のかけ路のけはしけもなし
飛鳥井家月次御題に 樵夫帰
- 1463 くれ深く帰る山路のくるしさも月に忘れてうたふ柴ひと
帰るさのうさを慰むひとふしやきこりの歌の遠き山かけ
刈はこふしつか真柴のおひ風にかへる山路や猶いそくらむ
隠士出山
- 1464 かくれかの雪わけ出て山人もみやこの春にあふやうれしき
のとき御代の春あふうれしき
- 1465 かくれかの雪わけ出て山人もみやこの春にあふやうれしき
のとき御代の春あふうれしき
- 1466 かくれかの雪わけ出て山人もみやこの春にあふやうれしき
のとき御代の春あふうれしき
- 1467 かくれかの雪わけ出て山人もみやこの春にあふやうれしき
のとき御代の春あふうれしき

- 1432 1431 1430 1429 1428 1427 1426 1425 1424
 わたり八寸になん餘りぬ 或人は是を見て 大よそ都の嵐山
 の形にや似たるならんといへり けにもなたらかなる山のため、す
 まるに 谷のかしらより瀧の落くるさまは かのとなせをやうつ
 すらんと見ゆ ふもと寺のあたりもそこと思はれ 前は大井河
 のめくれる心地す つるに嵐山となつて をのれかつ
 ねの甑ひ物にそなふるとて
 嵐山うつすいはまの波の色となせの瀧も落してそ見る
 名に高きあらしの山の面影に戸難瀬をこめてうつすいは波 〔137・和〕
 鶴の河より拾ひ来れる石を 盆山になしける時
 いく千とせ契りやをかんすむ鶴の河邊の石を宿にうつして
 或人の 盆石を千年山と名つけ、る時
 とことは千年の色もこもるらし動かぬ山をうつすいはほは
 盆石を夕波となつけ、る時
 ゆふ汐の入海とをき流れすによせくる波もおもかけそたつ
 雑聲
 山かせもひ、きあひつ、瀧川の音もと、ろにおつる岩なみ
 雑色
 はれわたる空もひとつにみとりなる色やあらそふをちこちの山
 人く題を探りて哥よみける時 南北
 嵯峨の野はまた春寒き昨日今日伏見の沢に若菜つまはや
 くる鴈に帰るつはめのかよひ路は同じ雲井にかはるこ、ろか 〔ウ〕
 1442 1441 1440 1439 1438 1437 1436 1435 1434 1433
 数を分ちて哥よみける時 六
 かきわくる其くさくさはもろこしもやまともおなし言のはの道
 十
 めつらしくけさはみやこの九重に一重かさねてつもるはつゆき
 人々物の名を分ちてよみける時 きちかうのはな
 世はなれてむすふさ、屋の軒ちかう野は夏草のいやふかきかけ
 なからのほし
 若菜つむ袖のけしきは春なから野はしら雪にさゆる春かせ
 ふしのやま
 引むすふしの屋まはらに吹なして餘りはけしき山のした風
 こてふ うつせみ
 まつ人はとひこてふくるよはの月面かけうつせ身にそへて見ん
 やよひはかりに 人の山莊に友とちさそひてまかりける時 〔138・和〕
 庭にさまくの花とも咲出たりしを題にして歌よみけるに
 からも、のはな
 山深く住なれにける身なからも物は中くさひしかるらむ
 からも、つ、し
 陰くらき山路なからももる月の光まちつ、しはしやすらふ
 眺望
 山々は八重たつ雲の半天にひとりはれたる高千穂のたけ
 はれ渡る山のみとりもむらさきに夕日いろとるをちこちのみね

- 1401 雪の中にふかき色そふ梅花うつせる筆の跡もにほひて
 1402 同しく 松の上に鶴の巢くひたるさまを見て
 1403 仰き見る松の常盤の陰ふかみつるも千年を契てやすむ
 1404 松かえのさかへをしめてすむつるの同しちとせや宿に契らむ
 飛鳥井雅光卿の御許より 京の人平在明となんいへる
 画師にかゝせ給へる瀧の絵に 雅光
 1405 絲の色に千世をはかけて養の老せぬ名にも見ゆる瀧かな
 1406 といへる御歌をかゝせ給ふて賜はりしかは 忝さに よみて
 奉りける
 1407 千世かけてたえす仰かん筆の色に老を養ふ瀧のなかれは
 1408 言の葉に千世の色そふうつしゑの瀧のしら糸くりかへし見ん」(ウ)
 人さつとひて 弓の勝まけ争ひけるを見て
 1409 ものゝふの道にたゆまぬ梓弓やたけにもあるか人のこゝろは
 琴
 1410 山水のしらへ知てふふることも独きく夜のあはれとそなる
 飛鳥井家月次御題に 夜琴聲
 1411 月にふくみねの松風小夜ふけてことのしらへの澄のほるこゑ
 1412 まつかせもひゝきやかよふ中のをの長き夜あかぬことのしらへに
 同しき御題に 船
 1413 沖つ風たえてなみまにこく舟は急く心や追手なるらむ
 1414 たれか身も浮ては沈むうら船のたゆたふ浪のあはれよの中
 1415 誰となくしるもしらぬも渡し舟行も帰るもさすか隙なき
 渡舟
 1416 住吉社奉納哥の中に 浦舟
 1417 浦浪のあけはなれゆく芦間より一葉こき出るあまの釣舟
 飛鳥井家月次御題に 舟路遠
 1418 梶枕いくよになりぬゆく船の末の日かすもしらぬ浪路に
 1419 わたつ海の跡なき浪にゆく舟は風や千里の道しるへなる
 暁鐘
 1420 いつか身のうき世の夢はさめなまし暁つくるかねのひゝきに
 暁鐘
 1421 鐘のおとを餘所にきゝなす怠の身には驚くたくれもなし
 1422 月をまつたか心にかいそくらん尾上の鐘のくるゝひゝきは
 1423 百首哥の中に 夜燈
 飛鳥井家月次御題に 閑中燈
 1424 ふくるよの寐覚伴ふかひもなし学はぬ窓のともし火の影
 1425 怠の窓にふけゆくともしひの光もほそきよもきふの奥
 1426 あはれたかふみをまなひの窓ならん影もしつけき夜半の燈
 盆中の石を玉津島と名つける時
 1427 おもかけにあかす立そふ玉津嶋入江の浪の清きひかりも
 黄鶴河といへる所にて一つの石を拾ひ得て やかて盆中
 1428 の山となせる事あり 高さ三寸ばかり すそはよみに流れて

1382 冬かる、嶺の梢の木葉猿たへぬあらしやわひて啼らん
「ウ」

魚

1383 深しとも人やはしらん河瀬にさはかてあそふ魚のこゝろを

池魚

1384 うろくつもすむやしつけき池水の玉もの陰をかくれかにして

飛鳥井家月次御題に 池上亀

1385 つくりなす岩ほに亀のすみ馴てよもきか嶋をうつす池水

苔のむす池の岩ねに所得て緑の亀も千世やしむらむ

貝

1387 浦風ものときき春の折にあひて千世の花貝かすもつきせし

1388 長濱の浪の花ちる秋風に千種の貝も乱れてやよる

虫

1389 あらしふく秋の木葉はみの虫のみの程たのむやともはかなし
「(34・オ)」

蝶

1390 花にのみおもひたはれて迷ふ身は我やこてふの夢の世の中

飛鳥井家御題に 書

1391 かしこしななにはの事のよしあしも迷はぬ道をふみに傳へて

1392 かき流す世のふる事も目の前にうつす鏡や水くきの跡

鹿兒島なる長野祐喬 武蔵の国江戸に趣きける時の

日記を旅のすさひと名つけて 見せけるをかへすとて よみて

つかはしける

1393 むさし野の旅のすさひも数々の言の葉種に見えて珍らし

同じ祐喬 都にのほりてふた年はかりを送りける時 嵐山

の春の花 高雄山の秋の紅葉 其外名た、□ところへ見

めくりしありさま共 面白くかきのへしひと巻を見せければ

そを返し遣はすとて 書添ける

1394 花紅葉色こきませしひと巻は是そ都の錦とや見む
「ウ」

安山親敬長月の半過る頃ほひ 鹿のね聞んとてある

山里にまかりける時 其夜のさまともつはらにかきつ、け

数々の歌よみて見せければ かく申つかはしける

1395 かすくの言葉の露そ光そふ鹿なく山の月のゆふへは

歌袋てふ物を作りて 楠田淡水の許に添て遣はしける

1396 色も香もまさる日ことにかきよせて言葉の花はあたにちらすな

光そふ浪の玉藻の数々をかきあつめてよ和哥の浦輪に

天保十一年かのえねの冬

1397 飛鳥井前大納言雅光卿の御許より 豊岡大蔵卿藤原

治資卿のか、せ給へりしうつし絵 鶴と梅とのふたひら

を贈り賜はりければ 忝さによみて奉りける

1398 うつしをく筆の光のかすくに恵の露のふかきをそしる

鳥の聲花の匂ひも写しゑのえならぬ筆にそふかとそ見る
「(35・オ)」

右の写し繪 雪の中に梅の花咲出たるさまを見て

1400 さく梅の花はめつらし雪の中にこもれる春の恵しられて

1356 くれことにおなしねくらや契るらむはやしの鳥の友さそふ聲
 1357 ねくらとふこゑやいく村山からすつはさもわかすくる、林に
 百首哥よみける時 鶴
 1358 和哥の浦や芦邊になれて言の葉の道やまなはんまなつるの聲
 1359 心あれやあまとふつるもへたてなく馴し沢邊の友さそふこゑ
 夜鶴
 1360 さゆるよの月もふけるの浦風に子をおもふ鶴のねられすやなく
 飛鳥井家御題の中に 海邊冬鶴
 1361 月になく聲も寒けし難波潟入江の芦の霜のしらつる
 1362 なには濁芦間の霜のさゆるよを月にうらみてたつの鳴らん
 1363 うら風もよや寒からし霜かれの芦へにたてる鶴の毛ころも
 鶴立洲
 1364 夕なきの見るめはるけき沖つ洲に立もさはかぬ浪のしらつる
 1365 海あらき浪のしらすの塩風に鶴の毛衣うらみてやなく
 住吉社奉納哥の中に 島鶴
 1366 立なれて千年をまつか浦島にこゝろありてやつるも住らむ
 1367 ところから心ありてやすむつるも千世を契らん松賀浦島
 同しき奉納の中に 暁雞
 1368 怠らぬ道を訓への庭つ鳥今はあけぬとつけてなくらん
 飛鳥井家御題に 枕上聞雞鳴
 1369 鳥かねは何をつくらんす事もなくて目さむる老の枕に

〔32・ナ〕

1370 つとむへき暁をきやす、むらん枕にちかき庭鳥のこゑ
 同し御題の中に 白鷺飛
 1371 ひとりなる山のはつかに一むらの雪のしら鷺みたれてそとふ
 1372 しら雪の色もさやかに山のはの緑をわたる鷺の一むれ
 竹間雀
 1373 くれ竹のはやしにきゐる村す、めちよを囀るこゑもつきせし
 虎
 1374 猛してふ虎もあたる争ひの果はうしなふ身としらすや
 飛鳥井家月次御題の中に 熊
 1375 山ふかくすむあら熊のこゝろにも猶うつほ木に身をかくすらん
 1376 はけしさはうき世の人にくらへ見よみ山の熊のあらきこゝろを
 馬
 1377 あはれ世に老たる馬のかひもあらし千里にかけろ、ろはかりは
 年頃やしなひ置ける馬を よそなる人にこはれて つかはし
 ける時
 1378 わするなよ別る、道は遠くとも手馴の駒のなれしやとりを
 猿
 1379 うる事を思ひの綱にひかれゆく心の猿のさはかしの身や
 山かせのさはく木末になく猿のやすからぬ身に子を思ふらむ
 飛鳥井家月次御題に 嶺樹猿 十一月
 1380 風さそふ嶺の落栗しけからし枝の友さるこゑさはくなり
 1381

〔33・ナ〕

- 1332 ふかき夜のたか琴のねにかよふらん松にしらふる風のひ、きは
松下風声 正月曾始
- 1333 いく千世もかはらね春のことふきをのとかによはふ松の下かせ
とことはに千世をしらふる松風のひ、きもいと、春にのとけき
住吉社奉納哥中に 峯松
- 1334 塵ひちもつもれる山の峯高くおひのほる松やいく千世のかけ
嶺上松 「ウ」
- 1335 横雲はわかる、をちの山のはにあらはれそむるまつのむら立
潤底松
- 1336 谷陰におなし世をふるうもれ木のたくひにはあらてさかふ松か枝
人しらぬみ谷の松のいく世さか宮木にもれて年たかきかけ
巖頭松
- 1337 さ、れ石のなれる岩ほにおひのほる松も八千世の数やかさねん
海岸松
- 1338 塩木にもならていく年ふりぬらん磯屋の軒の松のひとと
もしほやくいそ屋はくらし一もとの松のけふりもかけを深めて
砌松
- 1339 十回の花のさかへもみきりなる松の常盤の陰に契らむ
松臨池
- 1340 よろつ代もかれなてすめる池水に松や葉かへぬ影うつすらん
松影浮水 「31・ウ」

- 1344 影うつすきしねの松のふかみとり池の面にも千世は見ゆらむ
いはか根に千世もくもらし松の葉のちらてうつろふ水のか、みは
松為友
- 1345 立なれて友なふ松の陰深み宿のちとせもしる人にせん
飛鳥井家正月御曾始の御題に 松久緑
- 1346 いく千年かはらぬ色にひとしほの緑をそふる春の松かえ
みとりたつ玉松か枝や春ことに千世の光をみかきそふらむ
同じき御曾始に 春松契千年と云事を
- 1347 たか門も春たつけふの松かえに契る千年の陰はかはらし
春ことにちきりやそへん一入の松のみとりにこもる千年を
増水氏輔か前栽に松の有けるを こひ得てをのれか庭に
うつし植ける時 よみてつかはしける 「ウ」
- 1348 今よりは我も千年をまつの葉のかはらぬ陰に立馴て見ん
あまたの草木を題に分ちて人々哥讀ける時 杉
- 1349 ます神の直きを守るしとやたてるも深き三輪の杉村
同じ中に 檜
- 1350 す、しさをひと木にこめて夏の日ももらぬ廣葉のならの下風
飛鳥井家月次御題に 春鳥
- 1351 梅かえの花のねくらやあれぬらん 桜にうつるその、うくひす
子を思ふ野邊の雲雀に夕暮の妻こふきしも聲かはすらん
同じき御題に 林鳥

1309 冬かる、刈田のくろの柳かけ残るいほりも見えてさひしき

飛鳥井家月次御題に 田庵 十一月

1310 住すてししつか刈田のかりのいほ今は時雨のもるにまかせて

1311 あせをもる水音寒し小山田に残るいほりのあれまさるころ

飛鳥井雅光卿の御許より 小田のほとり近く賤か家

ゑかきたるを賜はりて それに讀つかうまつるへきとの

仰こと侍りければ よめる

1312 夕日さす外面のかり田あらはにてしつかさ、屋の陰もさひしき

1313 鹿のねもなれてきくらん岡邊なる小田をみきりの賤か庵は

路苔と云事を

「
(29・オ)

1314 むす苔のみとりも深し小男鹿の通ふ跡のみ見ゆる山路は

百首歌の中に 岸苔

1315 敷すてしたかふるさとの苔むしろた、める岸も幾世かさねて

江葦

1316 いさり火も光かくれす見しま江の芦の若葉の陰浅きころ

1317 おひしける緑もふかし難波江やこやも隙なき芦の八重ふき

草木の名を分ちて人々歌讀ける時 蓼

1318 夕日かけうつる河辺の紅^にゐにほたても秋の色やそふらむ

芭蕉

1319 深き夜の夢も破れて村雨のうつおとすこき窓のはせを葉

岡笹

1320 旅人のゆき、の岡に打さやき風のたえまなひくさ、原

竹

「
(ウ)

1321 すくなるを心とや見ん山かせのおるへくもあらぬ竹のちからは

1322 そめし世のなみたの色やむら竹の枝葉に残る露のふること

1323 折ふしになひくも風のとかならん心むなしき竹のすかたは

里竹

1324 引かこふいく村竹の打なひきけふり色そふ山本のさと

飛鳥井家月次御題に 籬竹 十一月

1325 葉かへせぬみとりも寒し朝霜の深きまきになひく呉竹

1326 よろつ代の長ささかへもこもるらん笹の竹の千尋あるかせ

同じ御題の中に 植竹為友

1327 窓近くうへて友□ふ此君の直きにならふこ、ろことの葉

1328 うつしうふる砌の竹の幾千世もかはらぬ友と立馴て見ん

竹久緑

1329 緑そふみその、竹にもろこしの鳥もなれこんよろつ代の陰」

(30・オ)

百首歌よみける時 松

1330 花もみちはかりほとなき山風に松の操の色そこふかき

飛岡天神宮に梅桜松の三十首哥たてまつりける時

薄暮松

1331 月をまつ軒端の山の夕くれに時雨を送る松かせのこゑ

同じ中に 夜松風

1282 山風のはらふ跡よりちりしきて枯葉も深き松かせの庭

山家垣

1283 しら雲の行かふ外に跡もなし何かへたてん峯のまつ垣

あやめ田の山莊の門を改めたてける時

1284 あけてまつ人しなけれとたてかふる松のはしらに竹あめる門

1285 我が為にかこふはかりの松の門うき世へたつるすみかならねと

山家經年と云事を

1286 年月もうつりにけり山の井のあかぬこゝろにすみなる、身は

山家人稀

1287 世はなれて住つく山は柴人のしはしとひ来るたよりさへうき

1288 花紅葉まれの便にとはれすはわかすむ山の道やたえなん

あやめ田の山莊に或人の訪らひ来りける時

1289 ふみ分て又もとへかし山陰の庭の細道苔ふかくとも

(ウ)

1290 音つる、人のなさけの深さをもくみてやしらん山の下水

1291 山かせもこゝろにさはく程はあらし世のうき事におもひかへなは

同じ山莊にて折さよみける哥の中に

1292 引かこふ軒端の松も月かけのもりくる程をいさや拂はん

1293 せきいる、庭のなかれも深からす心の水のすみはてぬ身は

1294 春の花秋のもみちのおりくはわか山住をとふ友もかな

1295 おとつれのたえぬもさひし山陰の岩間のいつみ軒の松風

1296 山からすねくら求るこゑならて誰かはとはん杉のしたいほ

楠田淡水の 鹿児島をはるく逃れて 爰なる市木浦

といへるに来りすめりけるに 申つかはしける

1297 世をよそにへたつる宿の芦垣はうらふく風もさはるとはなし

1298 しつかにとすめる心は浪かせのさはくにもあらし浦の芦ふき

かへし

兼廉
(28・オ)

1299 世をよそによし隔つともこゝろある友しとはすは住うかるへし

1300 敷島にこゝろをよする友なくは住やうからん浦の芦ふき

同じき楠田氏の許に 春立ける日 申遣はしける

1301 よはなれていともとけきけふならん春をむかふる芦のしの屋は

田家

1302 いほりさす門田の秋や寒からん月と露とのもりあかす夜は

1303 よさむなる小田のかりほのいな筵しき忍ひてや守明すらん

百首哥の中に 田家雨

1304 すむ里のけふりの末も打しめり田面はるかにくもるむら雨

飛鳥井家月次御題に 田家朝烟 六月

1305 明渡る田つらの里の朝けふり深きや蚊火のなこりなるらむ

1306 あくるよの田面になひく朝烟立る岡邊の里もしられて

同じき御題に 田家夏

「(ウ)

1307 きえ残るよのかひやのうす烟なひくもすゝし小田の朝かせ

1308 涼しくも外面の早苗露見えて田つらの里にすくる村雨

冬田家

羈中夢

1257 日をへつゝ遠さかりゆく故郷もよのまや近き夢の通路

住吉社奉納哥の中に 旅泊

1258 沖つ風あらいきそへのうきねには心くたくるうら浪のこゑ

「ウ」

月十三首哥に 寄月旅泊

1259 浪まくらうしともいはてあかし潟月にうかるゝとまりとやせん

旅泊夢

1260 夢かよふ道はありけり泊船ふるさとをき浪の上にも

1261 いか^{見る夢もく}にねて夢も^たのまん湊舟まくらの下の浪たかき夜は

山家

1262 心こそ猶かよひけれ山すみのすてはてゝきとおもふうき世に

1263 とすれはかよふこゝろのいかなれや身は山住の捨し浮世に

1264 山里はおもひしまゝのさひしさにいかて住うき心なるらむ

山家風

1265 はけしさもなるれはなれて山すみの心のちりをはらふ松かせ

1266 山ふかき苔のみとりや拂ふらんちりなき庭の松のした風

「(26・オ)」

住吉社に奉りける歌の中に 山家風

1267 柴の戸のあけぬくれぬと音つれてたか為たゝく嵐なるらん

飛岡天神宮奉納哥に 同し心を

1268 はけしくもことゝふ山^{たゝくみ}のあらし哉かこふは浅き柴の戸ほそを

山家雲

1269 山深く身をかくすへきすみかとや猶しら雲の立かさぬらむ

1270 こゝろから戸さすともなきみねのいほあしたゆふへの雲にまかせて

1271 柴人もとはぬみ山の下庵にゆふへは雲の帰るをそまつ

山家夕

1272 よそよりもくるゝやいそく雲霧の立そふ軒の山ふかくして

1273 しは人のくたるやくるゝ空ならんみやまの里は鐘も聞えず

山家橋

1274 かくれかたとたのむ山路の谷陰になに朽橋の朽残るらむ

「ウ」

山家水

1275 山里はかけひの竹のよはなれて水の心もすみまさるらむ

1276 世のちりも又は濁すな山水のすみうしとてもすめるこゝろを

山家道

1277 月花の折きはらふこゝろかな誰をちきりし山路ならねと

山家鳥

1278 ひと声にくれぬとつけてなく鳥の帰る軒端も霧深き山

1279 名もしらぬ太山の鳥も馴きつゝ木のもとすみの身をやとふらむ

山家哥の中に

1280 鶯の出にし跡の谷深みわかすむ山は春もしられす

山家獸

1281 山ふかき軒の木末をつたひ来て我か友猿のとひなるゝこゑ

山家松

「(27・オ)」

- 1233 百首哥よみける時 山旅
行くれて枕やからん山かけにたのむ岩木はこゝろなくとも
- 1234 同じ中に 野旅
けふいくかやつれきぬらんあつまの、露分衣うさをかさねて
- 1235 旅夢
ふるさとに帰る夢路のいかなれや心はいそく旅のゆくすゑ
- 1236 旅行
たひ衣きのふはよそにみねの雲袖にそわくるけさの山こえ
- 1237 故郷を餘所にへたて、ゆく先もしらすいくへのみねのしら雲
朝旅行
- 1238 わけかぬる山路はるけし旅衣朝立いつる霧のまよひに
旅行夕
- 1239 里とをき山わけころもひもくれぬつかれの駒の道はす、まで
やとりとふ里もしられて旅衣すそ野の暮に鐘ひ、くこゑ
- 1240 雪中旅行
野路山路ゆくく深きしら雪のつもるは旅の日数なりけり
- 1241 旅宿
松か根にたのむはかりの夢もなし風のゆるさぬよはの旅寐は
- 1242 高城住吉社奉納哥に 同じ心を
露のみはなとむすふらんふる郷の夢をそたのむ草の枕に
- 1243 旅宿月
「
(ウ)
- 1244 みやこにて馴しをしるやしらぬ野に相やとりする露の月影
- 1245 ふるさとの面かけうつせ野への月草のまぐらの露をとひ来て
旅宿嵐
- 1246 見る夢をしはしたのむ松かねの床はあらしのなと拂ふらむ
ぬるひまもあらしの風のつらき夜に松かね枕何たのみけん
- 1247 羈旅
立出るなこりやはなきかりふしのひとよくにかはるやとりも
- 1248 枕かる山路のあらし磯の浪あはれいくよの夢さそふらむ
羈中山
- 1249 たひ衣わくる日ことに立なれて雲や山路のしるへかほなる
百首哥中に 羈中関
- 1250 わけかへる雪の戸さしやいつならんしくれてこゆる逢坂の関
飛鳥井家月次御題に 関路行客 九月
- 1251 たひ衣ひもゆふ暮の秋風はいと、身にしむしら河の関
ゆく人の跡やは見えん足からの関の八重山雲深くして
- 1252 羈中野
旅衣わくる果なきむさし野に草のまぐらも幾夜むすはん
- 1253 羈中衣
いく日数かさぬる旅のころも手は野山の露にくたさんもうし
- 1254 飛岡天神宮奉納哥に 羈中燈
ふるさとを別れし夜半の面影も残るかりねの宿のともし火
- 1255 1256

- 1212 みとりそふ軒端はくらし夏木立よつの隣もよそにへたて、
別
- 1213 別れ行つらさもあらし旅衣朝たつ道に駒もいさみて
くりかへし名残そたえぬ別路に手る柳のいとも乱れて
- 1214 鹿兒島の楠田淡水となんいへりける人 さりし弘化初の
年の頃ほひより此地に來り住みて 既に六とせ餘まりか程
馴したしみけるか ことし嘉永酉の年きさらきの末つ方
鹿野屋てふ里に住ところをかへてうつり行けるに 別惜
みて申つかはしける
「ウ」
- 1215 へたてなき心はかよへはるくしと野山のかすみ立わかれても
かへし
源兼廉
- 1216 野路山路よしやかすみはへたつともいかてころのかよはさら□ん
其後鹿野屋によく住つきぬと聞て 申つかはしける
なれくし山路の春を思ひ出よ花さく里にすみつける身も
返し
兼廉
- 1218 とにかくに住つける身も馴し山路の春は今に恋しき
春の半はかりに 川上親暁か武蔵の江戸に趣きける
を送りて
- 1219 いく千里わけ行まゝに言の葉の花や色そふむさしの、春
むさし野におもひ立ぬる旅衣はるのなかめも果やなからん
春の頃 安山親敬かおほやけの事につきて津国難波に
- 1220
- 1221 おもむきける時 はなむけしけるつゐてに
「
たひ衣はるのけしきになくさめよなには渡りに日はかさぬとも
五月の末つ方ものにまかりける時 或人の許より
郭公なき別れても秋はまた鹿のねともに聞んとそおもふ
となん申贈りしかは 程へてかく読て遣はしける
ほとゝきすなきてわかれしなこりとや袖も濡そふ五月雨の比
其後 文月の半過ける比 又なんかく申贈りける
もろ共にきかんといひし鹿のねをいく夜の月におもひいつらむ
旅
行くる、磯の松かね岩か根はいつれに旅の枕からまし
めつらしくなくさめて見る海山に遠き旅路のうさもおもはず
はるくしと道は野山にかはれ共わけゆく旅の末はかはらし
春旅
いつくにかやとり定めん花鳥にうかれてくらす春の山路は
「
冬旅
たひ衣わくる雪けの嶺の雲みやこの空にしくれてやゆく
まぐらゆふ枯野の霜に宿りけりふるさといてし秋夜の月
暁旅
旅ころもあかつきをきの露わけてならはぬ野へに袖そしほる、
月前旅
さそはれて月にやゆかん旅衣すそ野の道は露ふかくとも
- 1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1230
1231
1232
- 「
(23・ナ)

1190 うきてよるみるめもす、し夏衣かとり浦の浪のゆふかせ

百首哥の中に 磯巖

1191 動きなき世のためしかしら浪のあらふにつきぬ磯のいはは

水郷烟

1192 芦火たくなには渡りの夕烟春のけしきと霞みそふらむ

1193 淀ふしみひとつにかすむあした哉水の烟も春をふかめて

故郷

1194 たれうへて昔は千世や契りけん里も野となるいさ、むら竹

相知ける人のはやう住捨けるふる跡にまかりて

1195 住すてし庭の老木にことのねのしらへを残す松かせもうし

古寺

1196 苔のむす軒はいく世かふる寺の松も老木の年たかきかけ

1197 世のちりを猶拂ふらん山寺のみのりの聲にまじる松かせ

1198 人かけはたえてあらしの松の庭ふりて松陰に夕日もとはぬ奥の山寺

古寺嵐

1199 はつせ山あらしも法のこゑなれや朝ゆふさそふかねのひ、きに

瀧水山心岳寺と云にまうてける時

1200 塵の世をへたて、すめる山寺になる、瀧の水も濁らす

玉泉寺と云にまうて、庭の池のいと清らかなるを見て

あるしの僧に申贈りける

1201 瑠璃の池をうつせる玉のいつみにはみかく心やすみ増るらん

古寺道

1202 わけている木葉かくれにひと筋の道は有けりみねのふる寺

1203 朝なくあかくむ谷のかよひ路は苔のしつくもふかき山寺

古寺鐘

1204 吹送る嵐も遠しはつせ山檜原か奥の入相のかね

飛鳥井家月次御題に 夏草庵

1205 すきし世をしのふの露もふり増る草のいはりの五月雨の比

1206 かよひ路もしける夏の、草のいは契る人目の枯んと□する

秋門

1207 よなくの月そとひ来る八重葎しける門はさし□も

鹿兒島なる種子田昌邑となんいへる人 五月はかりに此里

に來りぬるよしにて 我かすみ所をとふらひけるか 内には入

もこすして

昌邑

1208 名のるまで聲はたてねと郭公杉のしるしの門になくなり

とよめるを短冊にかきて 門よりさしいれさせて帰りさり

ければ 其返しによみて遣はしける

1209 ほと、きすよそにすぎ行杉の門さすかこと、ふ聲はうれしき

(22・オ)

飛鳥井家月次御題に 窓

1210 あつむへきほたるも雪も何ならすまなはぬ窓の光なき身は

1211 ともし火の影もねふれる窓のうちは身の怠に夜そ更にける

隣と云事を

飛鳥井家御題の中に 岡秋

1166 なく鹿もたへぬは秋□おもひかな忍ふの岡のしのにみたれて
 1167 夕露のをかへのわさ□□よさらに鹿のねそへて秋風そふく
 (19・オ)

春の初つ方 気色杜の天神社に詣ける時 梅花の咲

乱れたるに鶯の鳴出けるをきゝて

1168 さく花になく鶯ものとなる春のけしきの杜の下かけ

関

1169 心から我とゆるすな何事も世には、かりの関のまもりを
 (まもらさめや かため)

関屋

1170 雨露のいかにもるらん不破の関あれ果し名も今に朽せず

百首歌よみける時 橋

1171 谷深きくち木の橋の危さもうき世を渡る道ならぬかは

瀧

1172 みなかみは雲よりひゝく天河せきいれておとすみねの瀧つせ

1173 世の□さのきこえぬ山にすむ人も心やあ□ふ瀧のしらなみ
 (ウ)

弥生はかりに 桃之尾の瀧といへるを見て

1174 花の色も咲みたれたる桃の尾の瀧浪ふかく匂ふ山かせ

加治木の龍門の瀧と言を見にまかりける時

1175 山水のけふりも深くたつの門霞をわけておつる瀧つ瀬

同じ所にて かの大和の龍門の瀧の事とも思ひ出て

1176 爰も又名にひゝきけり山姫の布さらすてふ瀧のしらなみ

飛鳥井家月次御題に 河水

1177 たえくにもるゝいはまの谷水も末はいく瀬の山川のなみ
 1178 花紅葉なかれて名にや立田河色かはりゆく水の春秋

同じ御題の中に 清瀧川

1179 夏山の影をうつして清瀧の川瀬の浪もみとりそふらん

1180 やとりくる光もすゝし夏の月清瀧川のきよきなかれに

池水久澄と云事を

1181 底ふかくすむやちとせの色ならん水の心も廣沢のいけ

海

1182 もろこしの塩路やつゝく松浦潟海原とをき浪のゆくすゑ

飛鳥井家月次御題に 冬夕海

1183 とを島のはつ雪白し夕時雨や、はれわたる沖の浪間に

1184 夕時雨すきゆく沖の雪間より入日うつろふ雪のとをしま

1185 伊勢の海や雪けにさゆる夕風のあらし濱邊にさはく白波

春浦

1186 なには津やかすむ春への夕波に梅かゝ遠くにほふ浦かせ

飛鳥井家御題に 秋浦

1187 秋といへは浦浪ひろくてる月のあかしもすまも名にや立そふ

1188 夜舟こく志賀のから崎月ふけて鴈かね寒き秋のうらかせ

同じ御題の中に 名所浦 四月

1189 春秋の海への浪の立かへり見るめにあかぬすみ吉の浦

(ウ)

(20・オ)

- 1141 峯の雪ふもとの時雨ふりわけておもひさためぬ空の浮雲
 1142 さゆるよの月もいくたひ晴曇り雪けの雲の定めなきそら
 1143 夕時雨ふるさと寒き浮雲は雪氣にこるやみよしの、山
 1144 さえくる、雲のけしきにしられけりさをなこよひの初雪の空
 雨
 1145 春秋の木^{のはの}のみとりも紅るも染出す雨や色をわくらん
 1146 むら雨のしつくもしけき木のもと笠やとりにも袖そ濡そふ
 夜雨
 1147 さひしさもかたらふ雨の音つれを夜ふかき老の寐覚にそきく
 橋雨
 1148 村雨のさそはれ渡る霧の中にたえくかゝるみねのかけはし
 1149 吹わたすみねのあらしのはけしさに雨もあしとき雲のかけ橋
 夕烟
 1150 濱松のこのまに遠きゆきけふり塩やくあまの宿もしられて
 暁
 1151 鳥のねはきこえぬさきも老か身の寐覚にしるさあかつきの空
 冬暁
 1152 ねさめとふ鐘のひ、きもさえ増る霜夜の月の有明のそら
 飛鳥井家御題の中に 夏朝
 1153 朝露もみかく若葉の玉かしはよのまの雨の跡そす、しき
- 「
 (18・ウ)

- 1154 けふも又なす事なくてくらす身のあすもありとは何たのむらん
 夕
 1155 時しらぬ雪のひかりもあらはれてあくる雲ゐにしらむふしのね
 百首哥の中に 山
 1156 春山
 のとかなる春の光に逢坂の山は雪けの雲も残らず
 長月の半はかりに 楠田淡水ある奥山に登りけるか 其
 所にひと夜やとりてあけの日帰りけるに 申遣はしける
 まささちるみねの嵐のそよさらに身にしむ秋や夕暮の山
 1157 お□かなく秋の太山の夜半の月いかはかりなる哀そふらむ
 1158 かへし
 兼廉
 1159 さらてたにさひしき山のゆふくれはいかにきけとか鹿の鳴らん
 1160 なく鹿の聲に哀やしられけん心なき身も袖ぬらしけり
 飛鳥井家月次御題に 冬朝山
 1161 よの程につもるや深きしら雪のひかりにあくるけさの山のは
 1162 残る夜の月に色そふ朝霜の光もさむき軒の山かせ
 同しき御題に 遠山如画圓 六月
 1163 ゑかさなす筆の勾ひかあけほの、雲もいろとる遠の山端
 1164 雲の峯目馴ぬ色もうつしゑのおも影にたつ夏の遠山
 高城住吉社奉納哥に 杣山
 1165 さかへゆく御代はいつみの杣山の宮木もたえぬためしにやひく

すさひ草 後編 卷之六

雑之部

飛鳥井家月次御題の中に 朝日圓如鏡

「
(16・オ)

1130 ます鏡かけし神代の影とめて朝日くもらぬあまのかくやま
1131 いつる日のくもらぬ影や朝ことにこゝろをみかく鏡とも見ん

同じき御題に 夏日

1132 春霞はれにし跡のくまもなく夏は日かけの照まさる空

1133 ほのかにも霞みし春の色な^さらて空もみ^{くまなく}とりには^する、日の影

風

1134 なひきふす民の草葉の上に見よさまる国の風のすかたは

1135 春秋にあた名やたゝん花もみちちりかふ頃の木々のやまかせ

野風

1136 身にしめて道いそくらんたひ人の袖吹送る野邊のゆふかせ

百首歌よみける中に 雲

1137 山遠く帰るも風のまゝなれやけに心なき雲のかよひ路

飛岡天神宮奉納哥に 暁雲

1138 空もやゝあけはなれゆく山のはにひと筋残る雲のかけはし

飛鳥井家月次御題に 夏曙雲

1139 ともしさすほかけは消てあくるよの光にしらむみねの横雲

1140 五月雨のよるのなこりを立こめてあけほのくらし山のはの雲

同じき御題に 冬雲

「
(ウ)

「
(17・オ)

1104 今はた、残るつらさのますか、み逢見し人のかけ□とまらて
「
(14・ナ)

寄枕恋

1105 跡もなき夢とはしるや小夜枕かはせし床のすきし昔を

飛鳥井家月次御題に 恋枕

1106 ちりをたによしや拂はし有し夜の面影残すねやの枕は

1107 誰にかはかくともつけんつけ枕かはせし夜半の昔かたりを

百首歌中に 寄衣恋

1108 袖の色もなみた染ますくれなゐのやしほの衣ふかきうらみに

飛鳥井家御題の中に 恋衣

1109 かさぬへき契をそ思ふ小夜ころもうらむる中のなくさめにして

1110 重ねしも夢かあらぬか今は又うらみにかへす夜半のさころも

同じき御題に 恋筵

1111 まつ夜のみ数そふ十符のすかむしろいく独ねを重ねきぬらん

1112 待わふる思ひは千さのひとりねを幾夜重ねつとふの菅こも
「
(ウ)

寄絲恋

1113 あふ事は猶かたいとの打はへてよるはすからにこひつ、そぬる
ヒヒヒ

寄鐘恋

1114 待得たるたか夕くれの鐘の聲忘らる、身にうさや告らむ
ヒヒヒ

寄弓恋

1115 いつよりかわか手になれんしらま弓人はあらしのこゝろつよさも

1116 引かはる人のこゝろかしらま弓いひしちきりの末もとをらて

百首歌中に 寄船恋

1117 よるへなき身をうら舟のいたつらに見るめもしらて恋や渡らむ

寄燈恋

1118 ひとりねのふけ行夜半に消やすきうき身の友とむかふとし火

飛鳥井家月次御題に 恋情

1119 わするなといひしを人のなさけにていくよなくに物□□ふらむ」
(15・ナ)

1120 いつまてかおもひたえなてうき人のなけのなさけを□□□むらん

寄涙恋

1121 限りなきおもひの程を人とは、つきぬなみたやさしてこたへん

恋泪

1122 拂ひあへぬゆふへの露のありとたに見せはや人に袖のなみたを

飛鳥井家月次御題に 恋香

1123 きぬくの別に残る袖の香や暮まつ程のなくさめにせん

1124 おもかけもさそふはかりにそらたきの匂ひ身にしむみすの追風

恋聲

1125 いたつらにまつよの鐘の声をかそへつくしてあけゆくはうし

飛鳥井家御題の中に 寄面影恋

1126 遠さかる心よいかうき人のおもかけはた、身をそはなれぬ
ヒヒヒ

1127 あふ事のたえにし中もいつまてか猶面影の身にはそふらん
「
(ウ)

同じき御題の中に おもかけ

1128 おもかけは猶そたえせぬあた人のかはるこゝろをうらみはて、も

1129 つれなさをうらむる袖の涙にもなれてそうかふ人の面影

- 1079 いつまでかうき独寐の床夏に思ひみたる、花の上の露
 1080 ひとりぬるわか床夏の花の上は露の契もむすふかひなし
 寄葛恋
 1081 うらむへき言の葉もなしくつかつらくるよはいつかかれ／＼の中
 寄芦恋
 1082 なにはなるうらみは深し乱芦のうきふししけき中のさはりに
 百首歌よみける時 寄木恋
 1083 いと、猶みたれてそおもふ青柳のなひくを人のこゝろならねは
 飛鳥井家月次御題に 寄常盤木恋
 1084 年へてもつみに葉かへぬ山松のときはにならふちきりともかな
 1085 あたにふる袖の時雨よ常盤木のつれなき人をおもひ染ては
 同しき御題に 寄花契恋
 1086 打とけて色こくむすふ契かな人のこゝろのはなのしたひも
 1087 色ふかくちきりし中もあた人のこゝろの花のうつろふはうし
 同し御題の中に 寄紅葉恋
 1088 あたし名はたつ田の山の初紅葉そめし思ひや色に出けん
 1089 晴やらぬ袖の時雨よもみちはの幾人染るおも□□ならむ
 同し御題の中に 寄松恋
 1090 かはるなといひし契の末の松うき年なみのこえ□□やする
 1091 山松のかはらぬ色と見しもうし下もみちする人のこゝろを
 寄杉恋
- 「ウ」

- 1092 つれなさは人のこゝろの色なれやうき年月をふるの神杉
 百首歌よみける時 寄鳥恋
 1093 あふむてふ鳥もことはをかへす世にいらへぬ人よいか、つれなき
 寄鶏恋
 1094 わかれ路はたえてあたなる暁を何ゆへつけて鳥のなくらむ
 1095 きぬ／＼はおもひ絶にし独寐をしらてや鳥のおとろかすらん
 飛鳥井家月次御題に 寄水鳥恋
 1096 たか方にともねや契るをし鳥のつかはぬ中を身のおもひにて
 1097 つらゝゐる涙の床や水鳥のねぬよもおなし思ひなるらん
 住吉社奉納哥の中に 寄獸恋
 1098 小車（よしく）の牛の綱手のいつまでかくるしき恋に心ひかれん
 寄鹿恋
 1099 我もおなしおもひの長き夜に妻こふ鹿のねをやそへまし
 寄虫恋
 1100 あたにのみ我も又ねをなくはてはうつ蟬のむなしき恋に身をやかへまし
 1101 ひと筋にまっつはかなしあた人のくるよしらぬさ、かにの糸
 寄蛛恋
 1102 いとせめて絶かゝる契りのあれよせぬ中やたのまヒヒヒヒヒヒしくもの井垣のまとを也とも
 住吉社に奉りける哥の中に 寄玉恋
 1103 から人の玉になく身よくらへ見んあはて年ふる袖のなみたは
 同しき中に 寄鏡恋
- 「ウ」

1053 もしほ焼くけふりを胸の思ひにて身はこりすまのうらみこそそへ
 1054 浦人のたくものけふり見てもしれたくれことにもゆるおもひを
 1055 あはれとも人やはしらん下もえのむねのけふりの消かへる身を
 飛鳥井家月次御題に 寄 霰恋
 1056 閨の上にふけて音する玉あられたま／＼人のとふ夜半もなし
 1057 おもひさへ千々に碎くるたま霰ふるさふすまのさえあかす夜は
 寄山恋
 1058 たえすのみ川は思ひのけふりにて浅間の山の浅ましの身や
 飛鳥井家御題の中に 常盤山 恋
 1059 いづまでもかはらぬ色の常盤山深き契をかけて憑まん
 1060 つれもなき人のこゝろの常盤山しけきなけきの果やいかなる
 寄関恋
 1061 心から立ててゆくうき中のかよはぬふみの文字の関もり
 1062 立へたつ人の心の関の戸に名のみかひなき逢坂の山
 寄原恋
 1063 うきふしもと、数そふしの原やしのにみたれて物思ふ身は
 寄橋恋
 1064 ひとことの便たになしかつらきの久米の岩橋こひわたれとも
 1065 こゝろのみかよふもうしやうき中はたえしゆふへの夢の浮橋
 寄川恋
 1066 人こゝろよそになりゆく鈴鹿川八十瀬の浪は袖に残して
 「ウ」
 (ウ)

1067 よしの川瀧つ心をせきかねてはやくもたてるあたなみはうし
 百首哥の中に 寄瀧恋
 1068 名にたつもよしやよしの、瀧つ浪流れて末の逢瀬たかふな
 寄海恋
 1069 かひなしやみるめからてわたつ海の深きにならふ心はかりは
 1070 深しとも人やはしらんしらぬひのつくしの海のつくすこゝろを
 寄浦恋
 1071 よそにのみみるめの浦の沖つ浪いつより袖にかゝるおもひそ
 名所哥よみける中に 阿波手浦
 1072 つねに身はあはての浦にやく塩のからしやあたにもゆる思ひは
 寄湊恋
 1073 立さはくなみたの袖のみなと舟よるの思ひそうきてたゆたふ
 寄磯恋
 1074 荒いそのいはほによするあた浪のをのれくたけて人そつれなき
 住吉社に奉りける哥の中に 寄草恋
 1075 いづまてかうき身にたえぬ思ひ草心をたねとおひしけるらん
 うき事をあたに忍ふの種よりやおひしけるらん身の思ひ草
 飛鳥井家月次御題に 寄若草恋
 1076 むすふへき契もしらす若草のうらなく何におもひ初けん
 1077 下もえのおもひはうしや若草のはつかに人をあひ見てしかな
 1078 同じき御題に 寄瞿麦恋

飛鳥井家月次御題に 車中恋人

1029 あたにのみしたふ車の下すたれ見すはうかる、こゝろならしを
1030 うしやた、よそに過行小車のめくりあは、といふ程もなし

春恋

1031 枕たにかはさはよしや春のよの夢はかりなるちきりなりとも
1032 袖ぬらす春のなかめようき中の契もよそにかすみへたて、

夏恋

1033 身のうさをなくさめて見る程もなしかはる契のみしかよの月

冬恋

1034 袖の上もふりみふらすみしくなりいひし契のさためなき夜に
「ウ」

暁恋

1035 あふとみし夢のなこりはありし夜の別に似たるあかつきの床
1036 おもひわひねられぬ床のあかつきは鳥の八聲もなく／＼そきく
まっ

飛鳥井家月次御題に 恋夕

1037 まつもうしとはぬもつらしつれなさの心やおなしゆふへなるらん

夜恋

1038 世に忍ふなみたもよるはゆるされておもひ数そふひとりねの床
にせく

寄月恋

1039 今こんと契りし人の兼言をいく有明の月にまつらむ
1040 わすれしといひしは夢かとはかりを見し夜なからぬの月にとは、や
かはらぬ

高城住吉社に百首哥奉りける時 同し心を

1041 きぬ／＼の袖にかこちしそのかみのわすれかたみや□の月
「」
1042 飛鳥井家月次御題に □月
1043 うき人のたのめもをかぬ俤をよなくさそふ月はうらめし
うき中のむなしき床に宿り来て涙もとむる夜半の月影
月十三首の中に 寄月忍恋

(10・ウ)

1044 よなく／＼にしのふは深き袖の露いつ知そめて月のとふらむ

同しく 寄月別恋

1045 きぬ／＼のなみたはつらしわかれ路のかたみに契る月も曇りて

寄月変恋

1046 かはらしといひし其夜の面影も月にそ残るひとりねのどこ

住吉社奉納哥の中に 寄雲恋

1047 あたにのみ思ひみたれて迷ふ身のたくひかなしき空の浮雲

寄雨恋

1048 とはぬ夜のさはりも人のとかならてなみた数そふ袖のむら雨
「ウ」
1049 まつよひの袖のみぬれてふる雨はさはるや人のこゝろなるらん

寄風恋

1050 うき人をおもひたえても聞わふる夕暮ことのまつかせの聲
1051 契り置し人は音せぬ夕ぐれのこゝろのまつに風そこととふ
1052 ちきりをかぬ身にもこゝろのさはく哉ふけてこと、ふ萩のうはかせ

寄烟恋

飛鳥井家月次御題に 同し心を

1001 月にそひ日にかさなりて晴やらぬ思ひや年に数つもるらむ
 1002 よな／＼の思ひは深きわたつ海に満くる汐のいやまさり行
 1003 人しれすつもるそふかき思ひ川恋の測せくそてのなみたは

片思

1004 我なから身の愚かさや恨みましおもはぬ人をおもふこゝろは
 1005 われも又思ひよはらぬつれなさをうき人にのみいかゝうらみん

恨恋

1006 身につもる恨を今はいひ出て人のつらさのかきりをも見む
 1007 身のとかに思ひなされぬうきふしも人の上にはいかてうらみん
 1008 かひなしや人のつらさの数々をこゝろひとつにうらみわひても

飛岡天神宮奉納哥の中に 同し心を

「
 (8・オ)

1009 契り置し其夜の事を思はすはつらしとのみや人をうらみん

恨身恋

1010 うき人はこぬよつものあま衣立かへりてや身をもうらみん
 1011 つらしとて人は 心だ うらみし何事も むま 我身 かたより ひとつの そ有ける とかに ヒヒヒヒヒヒ かこちて

互恨恋

1012 たか方のおもひや深きあまのすむ里のしるへのけふりくらへは

飛鳥井家月次御題に 人傳恨恋

1013 よそにのみたえにし中は人つてにうらむるふしもかひやなからん
 1014 つれなさにたへぬ恨のかす／＼を人傳にたにしらせても見ん

1015 うら風のたよりにせめていひよらんあまの住てふ里のしるへを

百首哥よみける時 忘恋

1016 契りしも夢とや人のおもふらんうきは忘れぬ身のうつゝにて

1017 浅からすむすひし物をあた人の契りよいか忘井の水

「
 (ウ)

被忘恋

1018 いづよりかかれゆく中の忘れ水むすふちきりの末もとをらて

1019 たか為に打な 何 かむらんうき人のおもひ捨にし はわすれ 夕ぐれの空 ヒヒヒヒヒ

1020 我のみはおもひいつともしらせはいひしはかりの人のちきりを

難忘恋

1021 今さらにおもひいてゝもかひそなきわすれしとのみいひし昔は

1022 わするなといひし昔のかね言をかひなき今の思ひ出にせん

絶恋

1023 うき中のたえし昔を今さらに思ふもくるししつのをたまき

1024 はかなくも猶くりかへしたのむかな手引の糸のたえし契を

欲絶恋

1025 うき中は竹の掛樋をゆく水のこほるよことに絶んとやする

互恨絶恋

1026 夕けふりたえん中ともしらさりし心 き くらへの はうし □□風 うき そうき

1027 たか方のうらみやまさるとはかりも絶にし中はいふかひそなき

不叶心恋

1028 わか名さへもれにける哉せく袖もこゝろにかなふなみたならねは

「
 (9・オ)

975 今ははやほにあらはれんしの薄しのふにたへぬ人のあきかせ

顕涙恋

976 せきあへぬ袖のとかとやかこたましわか涙よ 名は

「(6・ナ)

厭恋

977 今はた、あふせもよそになるみ渴なきたる朝の身をいか、せん

被厭賤恋

978 くりかへしたのむ契もかひそなきしつのだまきのいとはる、身は

變恋

979 うき人の心の秋やふか、らんいひし言葉も色かはりゆく

980 かはらしと契りし中の誠さへわかいつはりになす人はうし

変契恋

981 飛鳥川かはる思ひの測はうしたえぬ逢瀬を契てし身に

変約恋

982 かならずと契りし人のかねことはあはれいつれのゆふへなりけん

飛鳥井家月次御題に 稀恋

「(ウ)

983 別にし春の契をわすれすは秋くる雁のたよりにもとへ

984 うき事にうれしましる年月はたのめぬ宵も心にそまつ

985 へたてなき中かはるなかは口の関のあら垣まとをなりとも

旧恋

986 おもひ出よ又も逢見ぬ年月をふる河のへのすきし契は

987 つれなさも限あらはといく年を我もかはらて憑み来ぬらむ

近恋

988 隔ある人のこゝろはあし垣のまちかき中とたのまれもせず

989 ひまなくも見ゆるめやからん千賀の浦のちかきかひある中とたのみて

遠恋

990 はるくへたつる中の海山もかよふこゝろの道はたえせし

百首哥よみける中に 旅恋

991 おもひ出るふるさと人のおも影も月こそさそへ夜 旅寐に

「(7・ナ)

旅宿逢恋

992 ひとよのみむすふもはかなさ、枕かりそめふしの露のちきりは

飛鳥井家月次御題に 語恋

993 いか、せんあふは一夜の夢のまにかたりつくさぬ千々のおもひを

994 あふ夜にもつらさそつもる年月のうかりし程を語りいて、は

同じき御題の中に 増恋

995 月に日にたえぬおもひのます鏡見しおも影は身をもはなれす

996 日にそひていやまさり行思ひかな袖の涙も色をふかめて

逢増恋

997 うつり香もいと、身にしむ小夜衣かさぬるまゝにや、ふかくなる

思

998 深き海かさなる山をさしてたにおもひの程を人にしらせん

999 しはしたにこふる思ひもわするやとつれなき人に身をかへて見ん

「(ウ)

1000 いかにとか人にしらせん我なからはかりしられぬ底のおもひを

別恋

949 かさねてのあふよをあたにへたつなよ立別ゆくみねの横雲

950 あふ夜にはいひつくされぬ数さもわかる、今朝のなこりとそなる

暁別恋

951 あかつきの鳥につらさの数そひて我もねをなくきぬくの空」(ウ)

惜別恋

952 起出る人をうしともかこたれすしたふはおなし袖のわかれに

953 しぬはかり慕ふなこりをいか、せんあふはわかれと兼てしる身も

急別恋

954 わかれ路をいそくも人のとかならてあくる程なき空やうらみん

帰恋

955 帰るさのけさのうき身に立そふやあかて別れし人のお□□け

深夜帰恋

956 わかれ来し袖の涙もふりそひて夜深く帰る道しはの露

後朝恋

957 あかなくに別れし跡の朝寐髪みたれてのみや猶したふへき

958 きぬくの空に別れしみねの雲けさのうき身にきえやあらそふ

959 つらさのみうつ、に残るあした哉見しや一夜の夢のわかれに」
(5・オ)

後朝切恋

960 逢夜にもきえは消なん露の身をき所なきけさのなこりそ

961 この暮をたのむもはかな別路のけさの名残にたへぬ命は

名立恋

962 身につもる思ひはもえてうら人のもしほの烟名にたつもうし

963 流れての末はたのまん會瀬川身のあたなみの立もいとわて

無名恋

964 空にたつうき名はうしや浮雲のこゝろ隔つる人はなひかて
なひく
をしらぬ中に
ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

遇不逢恋

965 かはるなと契りし夜半の月のみや忘れぬ物と我をとふらむ

966 ひとりねのつらき涙に曇りては月も見し夜にかはる面影

967 有し夜のあふにかへなて今は又つらさにたへぬ命とをしれ

968 露の身のおふよの床にきえもせて今はた何をおもひみたれん」(ウ)

飛鳥井家月次御題に 同し心を

969 今は又うきせにかはる河竹のひとよはかりを身の契にて

970 おもかけやあたのかたみに残るらん見しよの夢を思ふ寐覚に

逢不會恋

971 うれしくも見しは一夜の夢なれやつらきうつ、に立かへる身は

飛岡天神宮奉納哥に 同し心を

972 もろ共に見し夜も今の独寐もかはらて月のこととふはうし

顕恋

973 ぬれまざる袖の時雨の日にそひて思ひの色やよそに見ゆらん

974 いつよりか色に出けん下紅葉また染かへぬ露のみたれは

欲顕恋

- 922 たか門かたゝく水雞の聲もうし契りし人を待ふかす夜に
 923 いつまても枯せぬ中や契をかん夏野の草の深きためしに
 924 同し御題に 秋契恋
 925 いく秋もかけてかはらぬ行末をめくりあふよの月に契らむ
 926 秋風になきて妻まつ鹿の音を契りしよはにかこちてそきく
 馴恋
 927 から衣きつゝなれゆくかひもなし重ねぬ中のへたである身は
 不逢恋
 928 ひと筋に思ふもあやな片糸のあはて年へし人のつらさを
 929 くれ竹の餘所にやなひく心よりたゝうきふしの我にそふらん
 930 しらせはやうきふししけきさゝ竹もひとよはせめてなひくならひを
 飛岡天神宮に奉りける哥の中に 同し心を
 931 あふ事にかへて契りし心よりつらき命も猶やたのまん
 契不逢恋
 932 契りしも夢かあらぬかうき人の面影ならてあふ夜半そなき
 偽恋
 933 いつはりのある世にならふ人そうき我か誠よりいひし契りも
 934 かはりゆく世のことはりになし果てうき偽も人にうらみし
 待恋
 935 こぬ人のつらさもさのみかこたれす契置てしゆふへならねは
 別路はまた身にしらてまつ宵のふくるそつらき鶏のこゑ
 936 まとろまは夢にあふこもありなまし幾夜をあたに待ふかすらん
 夕待恋
 937 とはしとは思ひなからもまたるゝやうき夕暮のならひなるらむ
 連夜待恋
 938 月をのみあたに待出るよなくのならひもうしやひとりねの床
 待空恋
 939 待出てうき有明の月をたにとはれぬ夜半のなくさめにせん
 940 もろともに契りし夜半の偽はとはぬもまつも身の科にせん
 恋歌の中に
 941 うき人を今はまたしと思ふこそ待より増るつらさなりけれ
 逢恋
 942 めくりあふ夜半を夢かとまとふ哉つらさはかりにならひこし身は
 943 あふ事のうれしさにのみ身をなしてつらき別□なき世ともかな
 944 あかなくの別をしらぬ里もかな逢夜□かり□れしさにして
 百首哥の中に 初逢恋
 945 こよひこそかはす枕のはつ尾花露の契やむすひそへまし
 飛鳥井家月次御題に 月前逢恋
 946 月もいさかはらぬ色を憑めをかんあふようれしき袖にやとして
 947 わするなよあはす枕の夜半の月めくり逢へき又の契りを
 祈逢恋
 948 かはらしなあふよはこよひはつせ山祈りしかひも深きちきりは

「
(3・オ)

「
(4・オ)

896 いつまてか忍ふの岡のしの薄ほにはいてすもおもひみたれむ
 897 せきかへす胸のおもひのかすくも涙になりてもれんとやする
 898 いか、せんなみたは袖につゝみても餘るおもひの色し見えなは
 飛岡天神宮奉納哥の中に 同し心を
 899 わか涙いつまて袖につゝむへきもらさは人のあはれとも見む
 忍□恋
 900 今ははや乱れそめなん年月をあたにしふのころもへにけり
 忍涙恋
 901 せく袖はよくつるとも我涙よそにもらさしむねのしからみ
 902 わか為につゝむもしらし忍ふ身のこゝろの外に落るなみたは
 903 せきかねてもるともよしやたか為にかゝるとつくるなみたならすは「ウ」
 904 世にもるはくるしき物としらせてもなとせきあへぬ袖のなみたそ
 互忍恋
 905 たか方もしけるは深きしのふ草おなしこゝろのたねならぬかは
 思ひ
 聞恋
 906 面かけも身にそふはかりしたふかなき、しはよその人のなさけを
 907 よそにのみきくは恋しきおも影のはやくもいかて我にそふらん
 聞聲恋
 908 ほとゝきす餘所なる聲をきゝしより心も空にこひぬ日はなし
 見恋
 909 袖の上はまなくもかゝる沖つ浪まれの見るめを身のたのみにて
 ちきり
 比比比

910 なひくへき契をそおもふ花すゝきはの見し袖に露もみたれて
 纒見恋
 911 不見恋
 912 分る野のもすの草莖それなからをしへぬ宿はとふ方もなし
 913 杉たてる門ならずとも尋ね見んおもふ心をしるへにはして
 通書恋
 914 かよふへき人まをしはしゆるさんわか玉章の文字の関もり
 915 よしや世にちらはちらなん言のはをかきやるふみに残さんもうし
 916 ちるともよしや思ひの数ゝをかきはもらさし露の玉つさ
 祈恋
 917 なひくへきこゝろを神にたのみても人はうき田のもりのしめ縄
 918 末かけてたえぬ契をしめ縄のくりかへしてや神に祈らむ
 祈難逢恋
 919 いのれとも人そつれなきみわの山葉かへぬ杉にならふこゝろは「ウ」
 契恋
 920 偽のある世なからもかはらしといひし契はしゐてたのまむ
 飛鳥井家月次御題に ちきり
 921 末かけて契りし中もいかならんかはるにやすき人のこゝろは
 同し御題の中に 夏契恋

翻 刻

すさひ草 後編

凡 例

- (1) 仮名を現行の平仮名に改めたが、漢字はなるべく原の字体を残した。改行の具合も原本の通りである。
- (2) 仮名遣いも原本の通りである。
- (3) 和歌には通し番号を付けた。又、長点は傍線で示した。
- (4) 欄外に記された感想は、(一) を付けて、詞書きの行に移した。
- (5) 訂正にはヒの付いているものと、付いていないものがある。訂正された表現は、本文の右に細字で示した。ミセケチ記号ヒは本文の左に記した。
- (6) 詞書きなどには、読解の便などの為に一字空けたところがある。又、詞書きに和歌めいた表現が出て来る場合も一字空けた。
- (7) 虫損の箇所でも、明白に文字が推測出来る場合はその文字を示した。しかし、判読不可能の場合は□□で示した。
- (8) 丁付けは、^(1・ウ) のようにして示した。
- (9) 空白部の広さは、必ずしも原本の広さを反映するものとはなっていない。

すさひ草 後編 卷之五

戀之部

初恋

今よりそ思ひたちぬる恋衣いつならひてかそての露けき

露はかりもらしやそめん初草のまたはつかなる恋のみたれは

いとはやもけつ方しらぬ思ひ哉けふたきそむるむねのけふりは

思不言恋

もらすへき底のこゝろをいつまてか山した水のせきと、むらむ

言出恋

打出るひとつふたつのことのはに残るは千々のおもひとをしれ

いひいて、人にしらせん池水のこゝろの底も見ゆ□はかりに

洩始恋

浅からぬ心見えすはいか、せんいはまの水のもらしそめても」

忍 恋

うきにのみたへぬ命のいかならん忍ふによはるこゝろならねと

「
(表紙)

「
(ウ)

(1・ウ)

十五郎俊秀・樺山武吉資雄・伊集院彦十郎俊徳・伊東齊之進祐陳・赤井清次直澄、大館四郎晴勝が次々と入門し、桂園派は急速に三州に広まって行く。都城桂園派の選歌集『都洲集』が刊行されたのは嘉永六（一八五三）年である。

周山が垂水を去った後の歌壇の中心となったと見られる伊集院兼愷による第二選歌集『浪の藻屑』が成ったのが天保六（一八三五）年、伊地知季虔編集の『垂城三十六歌仙』が成ったのが翌天保七年のことである。史料上で垂水歌壇の掉尾を飾っている本集『すさひ草 後編』が纏められたのは嘉永二年十二月であった。

この年の所謂嘉永朋党事件（高崎崩れ）で、山田清安は切腹を命じられ、八田和紀は謹慎処分を受けている。和歌上で垂水歌壇等の伝統的歌風を批判、否定していく桂園派は、政治上で世子斉彬擁立派として激しく動くとしていたのである。

伊集院兼愷の時代は、このような垂水歌壇の歌風の否定者の群れがどんどん大きくなるのを遥かに耳にしながらの時代だったのである。垂水歌壇が盛んになる中で成長した兼愷は、歌風の否定者達が急速に育って行くのをどのような思いで聞いていたであろうか。

垂水歌壇は、このように桂園派が三州に点火する直前に成立した、見事な伝統歌壇の花だったのである。一郷を挙げて和歌を作り、それを纏めるという作業が、中世的・伝統的歌風の終末期に『松操和歌集』という立派な形見を誘発したということは、霊妙な劇としか言いようがない。

その価値も又、そのような点にあるのに違いない。

垂水の文学(六)

『すさひ草後編』 第二冊(垂水市教育委員会蔵)

—南九州の国文学関係資料(二十三)—

橋口 晋 作

福井 迪 子

垂水歌壇の特徴はどのような点にあるのだろうか。

文化九(一八二二)年正月に編まれた、垂水の第一選歌集『浪の下草』の編者末川周山の跋文によれば、垂水歌壇は、天明六(一七八六)年に「此地西山と云るに閑居し」始めた周山が「ひとりふたり老浪のよるの伴ひに飛鳥井の流のたえくくなる雫をも汲んと」し出して作られたものとのことである。「飛鳥井の流」とあるが、周山自身が「難波津の道しるへと頼みし故大納言雅重卿」と具体的に師を記しているごとく、垂水歌壇は堂上歌壇の飛鳥井氏を師として始まったのである。

島津氏治下の薩摩・大隅・日向三州の歌人が堂上歌人に師事していたことは、『称名墓志』の称寝大和守尊重の条に、

和歌を飛鳥井權中納言雅親卿に學ひ

とあり、少なくとも十五世紀には遡る。その後、近衛植家や飛鳥井雅庸等が師として選ばれながら江戸時代に流れて行くのであるが、管見では、

享保前後に堂上歌人に師事するということが三州の和歌愛好者の間に一般化したように見える。第二十代藩主島津吉貴から第二十一代継豊の時代である。特に、中院通躬に日高曾右衛門為春・小森一山・牧仲左衛門胤昌・田浦檢校城賛が師事してからは、飛鳥井雅重・日野資枝と古今伝授を受けた堂上歌人に多様に三州の和歌愛好者が入門するようになった。堂上公家、古今伝授が一般の和歌愛好者の身近なものとなると共に、そのような格式が重んじられるようになったということであろうか(継豊が綱吉將軍の養女竹姫を正室としたことも、このような風潮を生む契機になったのかも知れない)。飛鳥井氏は、中でも称寝大和守尊重や島津図書頭忠長といった武將が師事した、三州の歌人とも最も関係の深い家の一つであった。

従って、垂水歌壇は、享保期以降の堂上歌人に学ぶという時勢に乗って生まれたものであるが、それは古今伝授を重んじる中世的、伝統的な性格の歌壇だったと言いうことが出来よう。

末川周山は文政十(一八二七)年に亡くなった。翌十一年八月には、川畑平太左衛門篤実が周山の企てを発展させたような、三州の「元亀天正より此方文政までの歌」を集めた『松操和歌集』を選んでいる。この歌集によって、堂上歌人に導かれた十五世紀以降の三州の名歌が伝えられることになったのである。

しかし、末川周山が亡くなった文政十年頃には、京都にいた山田一郎左衛門清安が香川景樹に入門した。次いで、八田喜左衛門知紀・伊集院